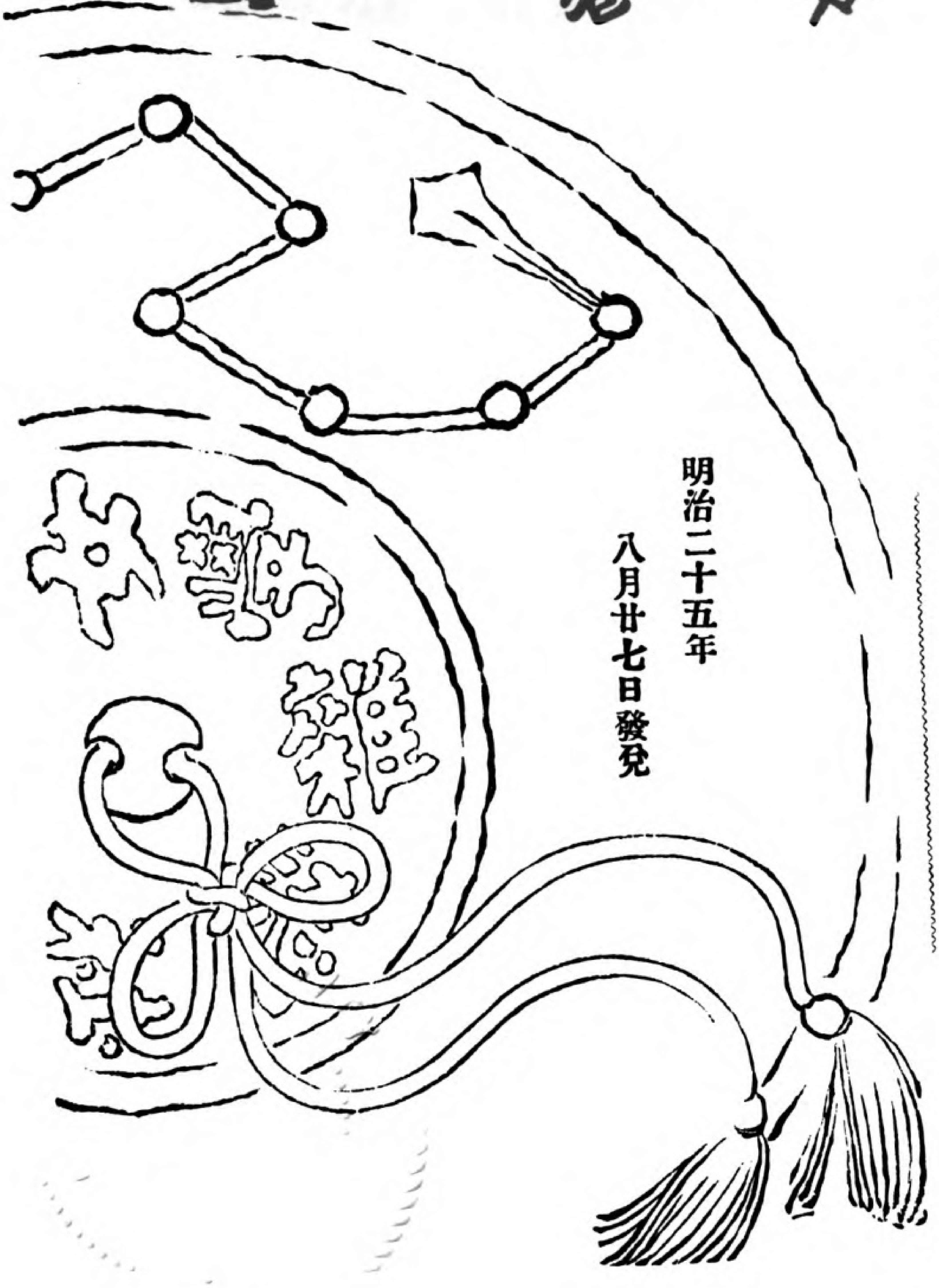
Aug. 1892
no. 326-1

女學雜誌

第三百二拾六號

甲の巻



明治二十五年
八月廿七日發兌

注意

社説 **各地青年會**に檄告す **孤兒院**の事業及救養**一篇**は目下各地同志の青年諸君が一讀三考を賜わらんとを熱望するの意見たり。**人物評短評**は德富蘇峯、植村謙堂、田口鼎軒、愛山生、停春樓、透谷、天知の諸氏が人と爲りを短評し且つ其晩近の人物評を評す。其他、雲峯子が桂園叢書の評、透谷子が文學一斑の評共に要緊を得たり **天地管見**に三篇あり。**續禪窟雜感**に九篇あり共に知人の讀者あらんか。摘要には大學總長 板垣伯、日本初期の傳道、地租賣却公債償却の新策、及び九鬼氏論 **小説**には若松しづ子が**人さまぐ〜**の第二あり

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 327. August 27th. 1892.

EDITORIAL:—To the Several Young Man's Associations in the Empire. The Orphan Asylum and its Support.

CRITICAL NOTES:—Recent Criticism on Personal Characteristics. Something of Literature, "Keien Sosho" etc.

MISCELLANEOUS:—A Bird's-eye View of the Cosmos. "Zenkutsu Zakkan" (Continued.)

NOVEL:—Hitosamazama. (II)

ABSTRACTS:—A Plan for Paying Back the National Debt. Early Evangelization in Japan. Count Itagaki.

CONTRIBUTED.

本號(第三百廿五號)目次

●社說　各地の青年會に檄す○孤兒院の事業及び救養(獻身者。注意す可き問題)

●批評　晩近の人物評短評(作家いろ〳〵)。春畝先生に與ふ。歴史家としての新井白石。德川家康。大臣月旦。一休和尙)○文學一斑(透谷子)○桂園叢書(雲峯生)○新日本史○家庭雜誌○新思海

●雜錄　天地管見(人物の理想。ユーモアの淸潔。正當なる自修鍛練)○續禪窟雜感(白骨の人先づ現はる。三女等の顏入來る。泣かしむる人屢々來る。夢に武器を得たり。漸やく興味の境に入る。禪僧厭世の色なし。坐禪堂の觀。禪宗臨濟派の敎旨。居士號を與へらる。)

●小說　人さま〴〵(二)とむらひ。(若松しづ子譯)

●摘要　地租一分を賣却して公債を償却すべし○日本初期の傳道○大學總長坂垣伯○九鬼氏洋風技術を排斥せし例證及び美術保護論

●寄書　故山の日(日本の一學生)

●片々　九州夏期學校の概況

前週(第三百廿五號)白表

○社說　情交の辨(上)

○兒監　我宿の花(若松しづ子)

○雜錄　支那婦人の婚姻○祝歌一首(雲峯子)○花を散らすダホミーの女軍

○批評　高等小學女子習字帖○明治政史○桂園叢書○文學一斑

○家政　家庭の養鷄

○史傳　加賀千代女○矢部まき子

○論說

○時事　海水浴○溫泉場の仕切り○洪水○女子參政權

前々週(第三百廿四號)赤表

●社說　時事小言二則

●小說　夏草(第二回)無名氏譯

●雜錄　別離(しのぶ)○田舍歎(道德界の零落、矯風上の音樂)方寸子○言責及吾鏡(口頭の言と良心の責、我を寫す二大鏡)山月子○洋行の箴一則○天地管見(博愛と熱愛)○禪窟雜感(坐禪修行の初感。閑境叫破の一聲。百魔交々身に迫る。文天祥夢に入る。牧師鍛練足らず。禪僧一夕話)天知子○三日幻境(透谷子)。

●史傳　封建君臣の好標本、白河樂翁公

●批評　明治政史○上代○歴史家としての新井白石○我國に宣敎師を送るの否を論ず○武人の虛喝何か有ん○外山正一君の女子敎育○二つ三つ○尼子義久

●片々　各地の靑年に告ぐ○各地靑年の運動報告

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百廿六號 明治二十五年八月廿七日發兌

社説

各地の青年會に檄す

謹しみて各地の青年會に檄告す。青年會は眞とに一地方の矯風軍なり、其勢ひの强弱は以て該地方に於ける魔軍の盛衰を示すに足らむ。

祖先の身代を貰ひ受け、一種の乞食となりて他の施與品を頂戴し乍ら、血統と法律とのお蔭を以て富家の壇那となり、揚々得意の態を以て、老成大人を氣取るものあり。斯の如く早や隱居の膽を冷やし、之を激勵して少しにても世の中のお爲となさしむるは、青年會の刺激による。

町村の役務に使はるゝ一種の奴隷にして、僅かの報勞金に衣食し乍ら、高帽に丈を伸して官員樣を氣取り、宴歌興樂に苦辛して當世風を得たりとなすものなり。斯の如き小公吏の腰を叩き、之を屈服せしめて人民の爲に眞正の役務を爲さしむるは、青年會の刺激による。

各地方に於ては、如此き事業引も切らず。其他、蝙蝠の如く地方に飛揚せんとして來る中央官吏の暴慢を防ぎ、又都人士が生意氣を挫く事、地方官吏が人民の正直なるを利用して我儘を爲さんとする腕を縛する事、其巡査警部が勝手の事を爲さんとするを取締る事、若くは、各地に數十年來鬱積せる弊風を打破し、之に染感して殆んど其中に生息したる老人輩を驚ろかし、濁々界に新空氣を引入れ、快然たる新天新地を結構する事の如き、皆な青年會特得の事業なりとす。

宗教界に於ては、區々として宗派を爭そひ、政黨界に於ては局促として政策を爭そふ。此時に當りて、其何れにも專屬せずして、政派宗派の上に超然として立ち、以て双方の毒弊を洗淸するは、又青年會の獨り爲すことを得べき快事業也とす。

青年會は、純泊と、淸潔と、學力と、憂國勃々の念と、人生最上の元氣とを集合する所ろ也。此ものにして若し眠らば、一地方矯正進步の事業を誰ありてか成さん。

謹しみて各地の青年會に告ぐ、貴會の團結彌よ固く、勢力彌よ進み、以て其地の矯風軍たらんことを、而して各會亦互ひに連通交情して、日本國裏に一大長軍を編成し、迫切岌々たる當今の時弊を救はんことを。果して此如くば、本誌は喜で其交通の便を供えんと欲するもの也。

孤兒院の事業及教育

（上）　献身者

赤子の世に出るや、上帝に代りて愛護慈育するの父母あり、天地に象どりて、之を宿すの室家あり、族戚之を祝ひて天の使の歌に倣ふ。夫れ、呱々として一と度び聲を曉天に破れば、紫の雲靉靆として朝日感謝の面てを照らす、眇たる一兒と雖ども、其生るゝや輕からず、多くの攝理惣べて焉に具わる。

たゞ彼の、生れて室家なく、父母なく、親近の族戚なき孤兒に至りては、天地みす〳〵之を何如に遇せんとする。泣く聲松籟に和して犬空しく吠ゆべきか、大廈、室閒として野外に人を追ふべきか。それ、何ものありて此の孤兒を養ひ、以て彼の愛眼慈々として之を托すべきものを求め玉ふ吾上帝に答え申すべき。

社友無名氏、ことし鎌倉に旅寢して山に故人を尋ね、松の樹影に、つゞれに包みたる捨子を見る。歎じて云く、かの故人を尋ねて破笠敝衣の老翁を見しとは聞けど、いかなれば予は今ま故人を尋ねて斯る汝の姿を見るらむ。この世の貧の涙を呑みて父母は汝を捨てたるか、人目にあまる迷ひを犯し父母は汝を捨たるか、父母は汝を捨たるに、汝は父母を戀しと泣くか、戀しとこそは知らずして猶戀しと泣くなるか。あはれよ天地の間に生れ來て汝のごとき命運の拙なきはいくばくぞ。左れど天地の間に泣かむものは汝のみかはと、いひてしばしそこに佇立しが、予は今ま故人を尋ね得たりと捨子を抱きて明月を望む程に、鐘は村雲のかなたに落ちぬ、と。夫れ、父母之を捨つるに、尙ほ之を拾ふ人あり。德は必らず孤ならず、彼の生れて未だ罪を知らざる赤子は、何をせん饑えて死すべき孤兒となりて了らんや。天下必らず濟ふ人あり、見よ所々に孤兒院の設けられて、其數のいよ〳〵加わるを。

ゼナシ、ミウレル、一信によりて万事を成さんと欲し、つら〳〵考慮して密かに惟みるやう、世に貧しきは多けれど孤兒の如く貧しきはあらじ、孤兒は受嗣べき身代を有せず、住ふべき家もあらず、凡そ賴よりなきものは多けれど、世に類邊なきものは孤兒に若かじ、彼は情けなき世の人に棄られたるにはあらず、世に於ける唯一の眞なる父母の情けをすら受ることあたわず、さらば、孤兒は天が下に於ける第一の貧人、

又第一の可憐者なり、然るに若し信によりて救はんとせば、此等極貧極乏の人をも尚ほ救ひ得て餘りありと示さんには、苟くも此等乏貧を極めたるものに稍や優りたるものゝ救を受得んは必然なりと知らる可けれ、左れば余は此の最上の賴邊なき人を信によりて救はんとて、彼は志を決して立てり。而してブリストルに於ける世界第一等の孤兒院は、今やたゞ彼が信によりて維持し且つ擴張せり我國近年ミウレル翁と志を同ふする人輩出し、身を献げて之が救濟育養に終生を與ふ。其決意する所ろに云く、若し餓なば孤兒と共に餓えん、若し死せば孤兒と共に死せん、否な、余先づ餓えて先づ死せざる限りは、斷じて孤兒をして獨り餓死せしむることをせじと。此に於てか、其財産を擲うつものあり、其學才を棄つるものあり、たとひ身につけるもの何もあらずとも、其身を全く献ぐ、少年有望の大志は中々に屈しがたきものなり、左れど多くの青年は其大志をも曲げて犧牲となれり。之を彼の權勢に戀々として民の膏血を枯らし、民利に言よせて無限の慾を恣ひまゝにせんとする族に比べて、懸隔何ほどぞ。吾黨は近年輩出せる多くの孤兒院設立者を敬するや久し。

吾黨深く彼の人々を敬重し、切に其の完全を求るが故に、敢て忠言を寄せざるを得ず。

（下）思慮す可き問題

そも〱諸君、東西南北に起つて、所々に其院を設立す、もとより地の遠隔の爲めに不得止の事由あるが爲めなる可し。然れども、諸君は之が爲めの故に必らずしも個々別立することを要せじ。たとひ其地を隔て、其院舍を別にすとも、其情を一つにして思ひを相通ずるは、極めて爲し易きことにあらずや。諸君元來すべてを捐て、たゞ義人の喜捨によりて其院を維持せり。其院はもとより諸君の物にあらずして義人の物たり。諸君が之を私くしゝ、之れを其特有物となさゞることは言ふ迄もあらず。左れば、諸君が實際に於て之を連合し、精神に於て之を合併し、緩急相助け、有無相通ずることを爲し玉はんに、何等の故障もあらじ。然るに、其の關係者の多少によりて宗派上の競爭を爲し、又は設立年月の早晚によりて長弟の感じを懷き、之が爲めに此の至美至淸なる計畫を俗化せしめて、尋常一般の世の事業の如く爲し去ることあらんには何如ん。かかる思望は腐れたる水源なり、此源より何の好き事出でんや。

たとひ幾多の義捐金も集め、無數の孤兒を養なひ得たりとするも、孤兒院と云へる眞誠の主旨に於て些との効益もなきとを知る。

此故に、現今既に成立ちたる十數箇の孤兒院は、たとひ其存在の地を異にすとも、其精神を共通し、憂樂を相分ちて精神上の合併を爲さんことを勸告す。而して、今后新たに設立せんとする人は、成るべく既成の者に力を合せて、有用の力量を個々分裂の無益に費やし去ることなからんを熱告す。

且や、孤兒院の救養法及び事業に付きては、今后大ひに注意掛慮する所ろなかる可らず。今日は概して創業時代の躰なるが故に、かゝる問題に思ひを潛むるもの至つて少なく、凡そ孤兒院と云へば、先づ多少の獻身者ありて率先義捐し、以て他の一般の人を動かして其義捨を促がし、其與ふる所ろを以て無告の孤兒を救養すると云ふにあり。手續き甚はだ簡單なりと云ふべし。左れど、孤兒の救養は凡そ何歳迄に限るべき乎、其敎育は何如ほどの程度となすべき乎、之をして勞働せしむる事業の種類は何を最良とすべき乎、孤兒に財産を分與すべき乎、分與するとせば其孤兒院に對する關係は何如にすべき乎等の諸問題は、極めて聰慧にして周密なる思慮を要す、必らずしも青年客氣の純泊なる熱心を以て容易すく決すべきにあらざる也。

夫れ、尋常の父母が其愛子を養ふ時すら、其保護を無限に與へず、必らずや或る年齡迄と限る。そは一定の年齡を越えて過ぎて之を保護する時は、子の獨立心を害して反づて之が發達を傷ふの故による。況してや、孤兒院の如く、何人と知れぬ無數の慈善者より續々黄金を寄せ來る所に置ては、義捐をあり勝の事として頗ぶる之に恃れ、人の助によりて生活するを珍らしからぬと感じ、爲に其獨立心を傷害する一層甚しきものあらんとす。故に、孤兒院の規則に一定の法を設け、凡そ何歳迄は義捐金によりて保育せらるゝことを得と云ども、其の以上は自ら汗して勞働自活せざる可らずと約するを必要なりとす。

凡そ、人の其財産に對するや、三段の變化を爲す。初段に於ては、財産を有せざれば恒の心なく放蕩亂逸にして安固する所を得ざる也、如此き輩は其產を所有するに至りて初めて道

德の萠芽を伸長す。中段に於ては、其產に執着し、世の富に誘われて靈の事を忘るゝにあり、富める人の天國に入る難きは之が爲めなり。終段に至りて、人その富の上に超然として立ち、財產を當然の地位に置きて之を相當に利用し、之を人世に於ける一勢力となして恰も好く之を善役す。

左れば、孤兒院が其孤兒を育するに當りて、初より之に何等の財產をも分與せざると定め、孤兒は到底私有財產を所有せざるものと豫定せば、德育上に於ける實際の結果反つて期望の反對に出づるとある可し、義捐の精神は美思なり、左れど義捐するに先ちては、先づ何ものをか所有せざる可らず、何ものをも所有せざるものに向つて初より義捐の風を吹込み、以て之を感化し得たりとするは、堅固なる德育にあらず。先づ四十日の誘惑を經て而してのち靈化するを法とす。元來有たぬものは其財產を惜しむの情もあらず、此惜しむの情なきものは遂に義捐に決するの德を立つると能はず。財產共有の制度なるものが、反つて意外の墮落を引き來る所以のものは、此理由に存す。左れば、孤兒も初めより財產を分與せずして以て其獻身的の精神を發達せしめんとするは正直にあらず、恐らくは反對の惡結果を生ぜんとす。

又た、孤兒院にて執る可き事業に制裁なかる可らず。孤兒に教育的の主意を以て執らしむべき事業と、其生活の用の爲に執らしむべき事業との間に判然たる區域なかる可らず。義捐者より得たる金は、其双方の何れに何如ほど迄で使用するとを得べきや。孤兒の獨立生計の爲に使用すべき金は何如にして之を得べきや。此の問題ことに尤も難し。

凡そ此等の理由は、皆な細密なる考思を要すべきものとす。

其他、此類の問題にして、同樣の注意を促がす可きもの指を屈するに遑あらず、彼の當路の人の之に着目せらる可きは言ふ迄もあらねど、吾黨仁義の君子は皆な之に熱意を注ぎ、かかる緊要の諸問題に其聰慧なる思慮を用ひられんとを促がさずんばある可らず。

批評

晩近の人物評短評

（一）作家いろ〳〵

是空子

流は尤とも入り易き所ろを穿つ。人の評亦た然り。人が、他の人物を評するに至りては、殊に尤とも然りとす。近年各種の性情の文士顯はれて、各其得所に隨ひ人物評を試ろみ、文學界稍や色めき來る。彼輩に八面玲瓏の批評眼ありと云ふものあらば、惜しむらくは未だしと答へん。たゞ蝮が蛇の道を知れるに至りては、誰か之を疑はん。

尙ほ隱れたるは固より言はず。晩近、文學界に目立つ人物評の作者を擧れば、先づ植村謙堂、德富蘇峯、田口鼎軒、山路愛山、及び停春樓主人、並びに我社の透谷、天知二子なる可し。

土礫落々たる間だに金砂を拾ふが如く、鬱屈偏僻せぬ人の性情の中に、天眞の美を見出し、高潔玄妙なる詩才を以て之を文鏞の表に發揮せしむるものは、謙堂なる可し。厭世の詩句に人性の要求未だ消えざるとを證し、放歌亂舞の間だに自然の道念尙ほ生きて煩悶するの狀あるとを示し、衆生皆な佛性あり、天下の人、皆な神の子たるとを論ずるに至りては、當時何人か、謙堂に優らん。彼は、人生の歸趣、天地の攝理、より立論す。其論は常にライフに關係す。故に其尤とも長ずる所ろの人物評は、大率ね、神學的、及び倫理的也。

新聞記者として生れたるは蘇峯君なるべし。或人、彼が政界に入らんとするの野心ありと言ふと雖ども信ず可らず。彼は福澤翁より義俠心を減じて其の形を小さくしたるもの也。彼嘗て翁の爲に辨じて翁の決して直接政治界に入らず、三十年來の經歷之を證す可しと言へり。余も亦た蘇峯君の爲に若く辨ぜんとす。君は新聞記者として生れ、亦新聞記者として今后いよ〳〵大發達せらる可し。ことに、政治上、社會上、經濟上の最近の思潮勢流を知るもの、君の上に優るものは少なし。尤とも靈敏に道德界の潮流を看取するは謙堂、尤とも神速に社會的の勢趣を察知するは蘇峯君なりとす。故に、其人物評に於ても亦た殊に此方面に於て秀づ。中にも、人の短所を摘發し、臟腑をマナ板の上に開張し、暗黑の裏にのみ威嚴なる一寸八分の尊像を古道具屋の店さきに列べ、朦朧たるが

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

爲に一種の風流氣ありたる人の皮を剝ぎて、三文の價値もあき樣に言ひけなすの技倆に至りては、當時君の右に出づるもの少なし。そも〳〵君の辯は君の文に優る、辯の好きにはあらず、天性口吶にして語を發するに勞苦するが爲めか、自づから熱心にして隨つて質朴なる所に於て味ひあり、其文の流暢にして輕薄なるに優る、然れども、人を罵倒するの妙に至ては、辯に於ても亦之を得たり、もし君が辯を以てして議場內瞬刻間の舌戰に臨まば驚ろく可き偉觀あるなるべし。然れど、君は實際に於て遂に此に至らじ。之を要するに、君の評は、社會的、政治的也。

蘇峯君に似て而して異なるは愛山生なりとす。其俠骨は、他に少き所ろ、其の生來の傳道心の亦た他に無き所ろなり。其才は之を誘惑して屢ば之をして政治界に入らしめんとするなるべし、少なくとも之を社會改良の舞台に導びかんとするなるべし。然れども最后に胸中聲ありて之を引止むるものは、傳道の二音ならんか。愛山生は蓋し、謙堂と蘇峯との合ひの子なる可し。故に、其の社會的、政治的に人物を評するに當りては、謙堂に優りて蘇峯に劣り、神學的、及び倫理的に評するに當りては、蘇峯に優りて謙堂に劣る。

万事に需要供給の理法を忘れず、常識に漢學思想を調味し天文は地文に均し、靈氣は物理に同じと哲悟獨斷するものは鼎軒君なり。君の本質は多感多涙なり、然れども、其經歷之をして世間俗界の常識を得せしめ、其の變則的の學問之をして冷淡なる物質論に歸依せしめたり。君が情と君が俠氣とは幾度びか「史海」の人物評を見て、吾主何ゆへに斯するとと歎ずるともあるべし。然れども、君が俗界に得たる常識と、漢學に變則洋學を兼ねたる物質的の哲學論とは、之を承知せず、人は石の如く、轉べば丸くなり、切れば角となり、貧乏すれば泥棒となり、富めば學問をするものと斷定せしむ。外迂なるが如くして內、極めて怜悧、一見漠然たるが如くして、實は至りて精密なるが故に、其想像の刄を握りて一と度び穿鑿すれば、九谷の底と云へども尙ほ多少の水を汲み取り、にこ〳〵として登り來ると見ゆるが如し。此故に、其の倫理上の人物評に至りては、半錢の價ひもなく、義人烈士をして憤慨止むと能はざらしむ(「日本」が君を誤解、否な酷評するものは蓋し此に因す)るにも係らず、僞善者、僞英雄、成上り

もの、権謀家、唐太宗流の豪人、クレヲパツラ流の可憐孃を評するに至りては、鑿々として能く當る。衣食足りてのち禮節の人となりたるもの、貧苦貧乏して盜賊となりたるものを評するには、君の筆を要す。蘇峯君を之に比較すれば、彼が氣焔の雄なるを見る、彼は人世に於ける神理的及び倫理的の勢力の偉大なることを忘るゝ能わず、君に至りては彼にすら遠ざかること更に遠し。君は是れ、政治上、經濟上、社會上に於ける人物評に長じて、而して蘇峯君を一層大ひに物質的にしたるもの也。其本質は、彼よりも多涙多感、且つ義侠なり、而して其の執持する所の論評に至りては如此し。あゝ、人や其學ぶ所を擇ばざる可らず。

停春樓主人の孟子論及び徳川家康論を讀むに、亦これ、蘇峯君を兄とし、愛山生を友とするもの歟。透谷及び天知の二子に至りては、吾社中の朋なるが故に評す可らず。たゞ、一は精緻なる公平なる眼を以て「眞理」と「學問」との爲に正直に觀察し他は豪快なる鋭利なる眼を以て誤られ易く且つ誤まられたる「人」の爲めに辨評す。透谷子の學、天知子の侠に至りて之を茲に明記するとも人大率ね否む所なけん。讀者若之を疑はゞ、試みに、透谷氏が徳川時代平民的理想の結末及び厭世詩家と女性の二篇、並に天知氏が、侠客論の一篇を取り、讀過せよ。

（二）　春畝先生に與ふ

國民之友第百六十三號は廣告して曰く、是れ空前の巨論と。實に其の從來幾多かありし人物論の中にても、空前の長文章なりき。曰く閣下は蛇の如し、其行く所、決して直線ならず其爲す所ろ決した經截ならずと謂ふに至りては、短刀直入、流石がの春畝先生も少しく赤面したるならん。而して此の文の長所は、春畝先生や、得意ならんとするの前に出でたるとにあり。彼の落胆者をして彌よ落胆せしむる記者得意の追打策とは異なり、斯く逃げがちの人を鼓吹して引張り出すは、やゝ徳ありと云はん哉。

（三）　歷史家としての新井白石

ボスエルがヂヨンソン翁を許する如く、愛山生は其崇拜せる先師新井白石を追讚す。其讚する所ろは、其理想とする所ろか。言々手應へあり、皆な金石の音を發す。

（四）　徳川家康

惜しむらくは、文に勞苦する所ろ過多、點々斧削綢繆の跡

を遺し乍ら、遂に「人物」を書き出して紙面に躍らしむるの妙に達ること能はざりしを。批評の躰、甘まく西國に則とるといへども、尙ほ漢學者の調をのこし、靈致雅趣ある文字も往々にして東坡先生の徒弟たるに於て止まんとす。然れども、刻苦勵精して思を構え、愼密謹勉に筆を遣るところ、其前途の多望なるに服するもの尠からじ。

（五）大臣月旦

近頃の如く自由に大臣を批評するものあるは、言論の自由となりたる一證か、此も彼も、三々に言ひけなすは恐ろしき程なるが、中には青書生の口吻を以て大家風に一評を嘲づるなどは心にくしと云ふべし。之とは相違し、鼎軒が例の愛嬌ある月旦に至りては、大臣諸君も腹を立つこと能はざるべし。凡そ死せし吾人を評する手際のよしあしは、其生ける今人を評するの當否によりて分明なり。鼎軒にしてたとひ史海に穿ち過るほどの穿鑿を爲したりとも、若し今人を見るに於て誤まらば、史海は一の架空論とならん。然るに、此度びの大臣月旦などは、破格の出來と云ふべし。或人、何ゆへに之を鼎軒の文と云ふかと問ふ答ふらく、「然り而して」の最と可笑しき所ろにあるを見るべしと。

（六）一休和尙

「余もし基督の道を信ぜずしてあらば一休となりたらん」と言ひ居る人、「女學生」の夏期號外に於て果して之を許しぬ。骨動き血熱して靈性將さに爆發の萠ある時、若し不完全なる人世組織の障害より之に「勢」てふ地位を與ゆるに肯んぜざれば、其天才は暢張せんとして益々非常の抵抗力を發起し終に矯激して種々の怪物を形造くるに、筆を起す。世の矯激者の性格を甘まく說明せりと云ふべし。

其憤激の聲は實に彼が大笑の聲となる、彼能く笑ふ、然れども其笑ひや、微笑に非ず冷笑に非ず、一種の凄味もなく一種の温味もなし、去りとて向陵子が所云る兼好の笑に非ず、憤激の鬱氣を冷散さす可き一種乾燥の一休流魔聲なり、此一種の魔聲は水清く人靜かなる紫野大德寺の奥まりたる所より折々に發して俠語的刺激を宣告しつゝありし也。

此一節、一休が人物及び事業を代言して餘りあり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○文學一斑（内田不知庵著）

透谷子

是れ内田不知庵主人が諸家の説を參配して博く文學を論じたる者なり。著者自ら序して文學の入門たるに過ぎずと云ふ。吾人も此著の以て不知庵の抱負を吐き盡くしたるものとは認めず、聞けば主人は更に大にこの題目を講ずるの志ありとの事なれば吾人は頸を延べて大著の出づるを待つなり。

此著題して文學一斑と言ふ、著者の意も亦存して此にあり。と知る、或は審美に入り或は修辭に及び、或は文學史に移りて講ずるところ自から整然たる秩序あり、後學を思ふ著者の赤心豈謝せざるべけんや、其總論、及び詩論は多く古人の説を咀嚼して以て我文學に應用したるやに思ざれど、其敍情詩を論ずるに至りては一家の定見動かすべからざるものあるに似たり。引例も特にめづらかにして著者の該博なる學識を思ふべし。一轉して和歌の盛衰性格を論じ更に俳諧の起原より芭蕉を品評するなど縱横の筆力羨むべし。最後に戯曲を論ずるところ尤も著者の識見を覗ふに足る。巣林子作の紙屋治兵衛を假り來つて講説するところ細微に徹す、左に卷末の一綴を載て著者が戯曲に對する所見の一部を示さむ。

「敍事詩は既に衰滅しぬ敍情詩は個人の小理想を歌ふものに過ぎざれば以て人類を指導するに足らず「ドラマ」は即ち小天地を作れる人間の運命を示し造化の法則を明かにするものなれば此黒暗地獄を蹈翻して須彌相世界を現ずるの燈王如來とならむ余は信ず來るべきの詩は此ドラマなるとを」

○桂園叢書

雲峯生

近來歌道の隆盛なると共に桂園翁香川景樹の名ます〳〵天下に高し、歌道に於て、翁が希世の大家たること一點の疑を容れず、人或は翁を評して加茂翁に比肩すと云ふあり、或は當時の歌人加藤（千蔭）、村田（春海）等の群に投ずるあり、又は定家俊成等と功を等うすと云ふ、敢て問ふ如何なる點に於てかゝる比較をかなす、思ふに未だ景樹翁が歌道に於ける卓識と技倆と功績とを知らざるの言のみ。

古今時代以降幾百千の歌人ありきといふと雖も多くは古風に泥み、舊學を守り、たゞ萬葉古今の語格句調をのみ之學び、敢て一己獨自の見識を立て、歌道の永遠不朽なる原理を説きたるものなし、或は一家の風を成し、或は自己の見識を備へしといふものゝ只僅かに古學の格調を說て之を永く歌道に應用

せんとせしに過ぎず、或は一家をなせると云ふも漸く萬葉古今の舊風を學び得たるに過ぎざりき、或はうたよむ方法を説きて歌道の衰頽を招き、或は謬見を唱へて世人を迷はせる等殆んど歌道に害ありて益なき人も多かりき、此故に古今時代以後は歌道年に月に衰頽して遂に和歌は一種の古學として世に存し、一般の世人は之を解することだに能はざるに至りき、天下亂るゝ時英傑の士を望むが如く、歌道衰へて此に大聖を要すると誠に切なりき。

天道あやまたず、此に希世の歌聖をおこして道を正に廢れんとするにひきかへしぬ、香川翁が歌は古語をとり出でゝ讀むべきものならず、其時其世の普通の言語をもて讀むべきものなり、萬葉古今の歌は今より見れば古雅に聞ゆれど其當時にありては皆普通に用ひたる言語なり云々と敎へ、又歌は何人もよむべきものなり、歌人と云ふて別に此道に身を委ぬるものゝみよむべきにあらず、平常心に感じ、胸に思ふ所を云ふ即ち歌なり、學者無學者老幼男女の區別なくよみうべきものなり抔説かれしことやがて歌道の眞意なれ、かくてこそ始めて世人一般にうたをよみ得べけれ、時世の變移と共に言語如何にかはり行くもまた新物新語の出づるあるも其代々に從つて容易く歌をよみ得可し、必らずしも古代の歌集を讀むを要せず、否却て古語古歌を學ばぬこそ却て時代に適當なるうたはよみ易けれ、景樹翁出で始めて歌道を不朽ならしむるの敎をたてたりと云ふも過言に非る可し、豈翁の功績赫々日月と共に輝くと云はざる可けんや、翁を以て細小の歌人に比してかれこれ論ずるが如きは實に誤れるの極のみ。

翁の功績と伎倆とは夫れ斯の如し、翁の遺書を永遠に保存するは誠に道の爲に望ましきことならずや、惜かな文運未だ開けざるの日とて翁及び其門弟等の遺書板に上らざりしもの少なからず、若このまゝにすて置んにはつひに空しく塵芥と共に朽ち果てん、之を未だ磨滅せざるに於て板にする誠に道の爲に大切ならずや。

井上通泰君夙に此に見給ふ所あり、幾多の歲月と財貨を費て東にもとめ西にたづね、或は桂園派師弟諸氏の傳記を綴り、或は其遺書殘芳を集められぬ、今回發兌せられし桂園叢書第一集は即ち其内の數篇を編せるものなり、編中掲ぐる所、桂園叢話第一編、袖くらべ、筆のさが、桂園一枝拾遺評、眞間

紅葉見の記、歸國日記の六篇なり、もとより未だ世に出でざりし遺書なれば何れも珍しきこと限りなし、其桂園叢話は曾て氏が栅草紙に掲げしものを増補せるなり、香川翁の系統、門地、官職、人物等畧ぼ之によつて知るを得べし、袖くらべは香川翁が東上する時の旅行記なり、其歸途の日記は中空日記とて版に上れり、筆のさがは景樹翁と時代を同うして東京に住みし加藤、村田の兩人が景樹のうたを非難し、眞足、布叔、知紀等が或は辨解し、或は批評せるものにて伴嵩蹊の奥書杯あり、いと面白し、桂園一枝拾遺評は景樹の歌集を當時の名家小林歌城が評せるものなり、以上二種歌道に於ける諸派の人々が如何に意見を異にするか、一目の下に明かにして從つて斯道に志す人を益する事多からん、眞間紅葉見の記は兄山紀成の手になり、歸國日記は熊谷直好の作なり、兩人共に桂門の高弟にして歌文共に見る可し。

以上諸種の遺書如何なる價値あるか、余は必らずしもこれらが已に版に上れるものに勝れりと思はず、否袖くらべを中空日記に比し、筆のさがを大ぬさと、紅葉見の記、歸國日記と吉野日記、中空日記、須磨日記等と比し來らば或は却りて劣る所あるやも知れず、然れどもよし傑作と云ふ可らずと雖も兎に角大人名家の作なり、之を塵芥の下に埋沒し去らんとするを幾多の歳月を費して遂に版にせる功績は苟も斯道に心あるもの丶謝意を表す可き所なり、其歌文の價値如何を論ずるは第二の點なり、余は先づ道の爲に井上君に謝す。

仄に聞く、君曾て古草紙に細字あるを見、取て讀めば桂園遺芳の一種なりき依て刻苦精營の後君からくして讀み取りき、亦一遺書の文字甚だ讀み難く何人も三行を讀み終ふる能はざるものを發見し讀む事七八度苦心慘憺の末君遂に畧ぼ解するに至れりと、其他叢書發兌に關して君の勞苦實に云ふ可らざるものありしならん余は思ふ天下斯道に志あるものは君に深く同情を表し、君に謝する所ありて可ありと。

こは第一集と記する故尙續で後篇を發兌せらる可し、君に望む、苦をつみ、勞を累ね、よく桂園叢書完成の大業を全うせられんとを、香川翁及び門弟諸氏の靈君が爲に瞑目せん、豈たゞに之のみならんや、天下豈君の功績を知るものなからんや、乞ふ道の爲に奮盡せられよ。

終に君が印刷、製本等に至る迄注意せられしを云はん、表紙

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に捺附せる紙片に桂園叢書と記す、此紙片は灰色にして桂の紋を三つすえたり、これ香川翁晩年に用ひし短冊に擬せしものなり、此紋印ある短冊は甚だ稀なりとす、製本は和洋折衷にて頗る美麗なり、活版も君自ら校合せるか、誤植もいと少し、尚二三の文字誤れるは再版の時改められたし。

先に畠山健君の桂園遺芳出で、今亦井上君の此篇あり、尚此種の書愈世に出でんには遺芳を永く世に存するを得べし、豈道の爲にこよなき慶事ならずや。　廿五年八月初六、

后進　雲峯　妄批

○新日本史

竹越與三郎氏の著にして、今や其中巻を出せり。此巻、維新革命に關する根本思想及び皇位性質の變遷。社會的革命、思想界の三分鼎足。舊社會の破壞、新社會の結合。三大思想の衝突及び其進化。財政小史。宗教の六篇に分ち、社會思想の變遷と宗教の移り行きとを叙せり。もとより簡易短畧を旨として新日本史の大躰を示さんとするものなれば、之に緻密深邃なる觀察を望むべきにあらず。行文の流暢自由にして滊車がレールの上を轉ずるの趣きあるによりて、讀者をして思はず三百葉を通讀せしむ。上巻に於ける如く人物上の短評あらず、福澤、福地、中村等諸先輩の上に快筆の加はらざるを遺憾とせらるれど、此は蓋し後巻の文學及び美術の篇の爲めに畜はえ置かるゝもの歟。宗教の篇基督教公許を請願するの文章及び一致組合兩派の合同不成立を評結する數般の如き、例外に餘論多く、坐ろに著者の當日を追懷せしむ。たゞ、記事の平衡を得るとに於て、所々此類の偏頗なきにあらず。大躰に於て、立論及び文章ともに上巻に優れりとする能わず。然れども、嘗ても許し置たる如く普通學校の普通に便利なる此書が彌い完成に近くを歡びて迎えずんばあらず。

○家庭雜誌

民友社より新たに發兌せられんとす、彼社の事ゆへ定めし面白く出來るなるべし、預じめ歡迎せんとす。

○新思海

山月子

新思海は京都上京區信誠館より發兌す、高等小學及び尋常中學々生の好伴侶たるべし。

何故と知らで心のさびしきは
なぐさまほしと言ふよしもなし。

讀人しれず。

雜録

天地管見

六合學人

（一）人物の理想

理想は將來の「我」なり、理想は「我」の前途を示す。もし人、或者の行く末何如あらんかを推測せんとを欲せば、須からく其理想とする所ろを覗ふべし。彼が未だ自から認識せざるに當りて、既に早く其の前兆を發す。理想は一種の占ひ也、其宣ぶる所は一種の預言也。

或人の理想は、其詩歌又は哲學的の持論によりて發現せらる。其の感情の尤とも多く刺激せらるゝ處ろ、若くは其用語の種類何如ん等によりて亦明白となるは、言ふ迄もなし。其の過ぎ經たる歷行、及び現在の地位、並びに現在に對する安意何如等の亦た之を示すとは、更に論を待たず。凡そ此等によりて人の理想を察すれば、人焉んぞ廋さんや。

脩道練德の人、そも〳〵何如んの人となりを其理想とする乎。余れ屢ば世人の爲す所ろに鑑みて頗ぶる其當を失するを惜しむ。世人多くは古今の偉人英傑を見て其理想とし、言動風采を擧げて之に似んとを希ふ。其篤志嘉みすべしと云へ共、其識見の卑しきを悲しまずんばあらず。

梅竹其姿を變え、又其用を異にす、彼等天來其職を同うせず、長所各別あり。人の世に出づる亦然り。各自其の最長所を發達し、其別々に天より禀けたる任命を果し、以て獨自一個の人となりを成就すべき也。天は人を個々別々に造り、其の靈性を別々個々に宿らしむ。個人は一の天地なり、其自身に於て、一の圓滿世界を顯昭すべし。此故に、人は銘々に於て其目的を所持し、各自其理想を異にすべし。或人の當に發達すべき人となりは、無論他の或人の發達せし所ろと相違すべし。偉人英雄といへども亦此理わりを免る可らず。左れば人の所有すべき各自の理想は皆な各自夫々に相違すべし。

偉人英雄は吾等が先輩なり、吾等は之を參考に供えん、然れども一々其言動風采を學ばんとを願わず。彼等もし梅花の如く薫せば、吾等は竹の亭々として優姿あるに似ん。

人は、他の人を拜す可らず。既に人を拜す可らず、何を以てか人以下の黃金、譽れ、地位、權勢を拜せんや、人の拜す可

きものは只だ上帝のみ、上帝を拜して吾等が理想を形ち造らば、人其當然の人となりに達するに於て、庶幾くは誤りなからん歟。而して、上帝を明らかに顯現するものは基督也。

（二）ユーモアの淸源

孔子は衣冠束帶して天帝の前に立てり、彼は天帝を畏敬すれども、其愛を覺らず。論語によりて考ふるに、彼は眞率簡易にして好く戯むれ、頗ぶる窮屈ならざりけん。然れども、其戯むるゝ時に當りて尙ほ天帝の前に立てりと覺えたりや如何ん。余は其の寧しろ否らざりしとを察知す。孔子すでに然り、彼の凡俗の戯むるゝものに至りては、當時胸中に一些の道なるものを存せず。或は洞然として戯むれ、或は無心にして戯むる、而も此等は尙ほ其可なるもの也。彼の酒杯の前に戯むれ、情慾の前に戯むるる者に至りては、醜態正視するに忍びず。此輩より樂しみて淫せざるの好戯樂を得んと、ほと〳〵覺束なし。

基督の徒弟は、明らかに上帝を認たむ。單に上帝を畏敬するにあらず、切に其の愛慈に親しむ。喩へば万乘の君を拜するにあらずして、一天の父に歸るなり。故に、其心いよ〳〵、上帝に近づきて而して其懷ひます〳〵平らかなり。彼等は、上帝の前に於て能く戯むる、宛がら父の前に群れ遊ぶが如し。クリスチアン、ユーモアの無邪氣にして且つ高潔なる所以此に因す。

（三）正當なる自修鍛練

修道者、自修鍛練なかる可らず。然れども、自修鍛練に其法を得ざるは、寧しろ僻見を固めて執着の念を長ずる也。君子大ひに戒しむる所あり。

余が自修鍛練は、信仰にあり。夫れ、信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據とするもの也、われら信仰によりて、諸〳〵の世界は神の言にて造られ、斯く見ゆる者は見るべきものにて造られざるとを知る（希伯來十一の一と三）。故に信仰とは、「見えざる者を明らかに見る」もの也。吾輩、此の信仰によりて、神を見る。神を見るとは、神の御前に出づるの謂ひ也。神は愛にして義あり、且つ全能にして何處にも居ます生ける大靈なり。吾輩明らかに其前に立てり。吾等が周圍には、義と愛と、全能の力によりて行はれ、而も此の大能者は何處にも居ませり。吾等明らかに其の前に出でゝ、朝々夕々、造次顛

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

沛と云へども其前より離るゝとなしとせば、頑骨治しがたきものも久しからずして化せざるを得ず。或人半日程子の庭に立ち出でて人に告ぐるやう、半日程先生と語るは十年學ぶに優る、君子の化は蘭の如く識らざる間に人を薫すと。半日、程子と接すると既に如此しとせば、不斷、上帝の前に立つ時其恩化幾干ならん哉。この恩化を聖靈の化と云ふ。此の化を明白に受けしむるは信仰によりて之に近づくによる。而して信仰は基督によりて生ず。基督、神を明らかに顯はし、信仰之を明らかに認め、吾輩明らかに神前に立ち、よりて以て其恩化を蒙むる。若しダルヰンの語を以てせば、吾輩神の包圍の內に立ち之に化せらるゝ也。若しドラモンドの語を以てせば、吾輩神の世界に生き其氣を呼吸する也。神學上、信仰の價値を論ずるは別題に屬す。道德上、信仰が能く吾輩を救ふの理解に至りては、余久しく此の如く覺悟せり。

日の下に舊きものを繰反すとなかれ、吾輩は復たび基督以前の脩道法に退歩するとある可らず。吾輩が自修鍛練は信仰にあり、一擧手一投足にも倘ほ信仰を失はざらんとを力む、之を吾輩の自修鍛練とす。

續禪窟雜感

天知子

白骨の人先づ現はる

靜思默坐稍々平を得れば昏散（思想の散ると）昏沈（心沈み睡りに冒さると）の二患交に來りて容易に定に入らしめず、禪窟に入りて七日目の頃、公案を工夫するに智惠才覺を用ひ盡し、漸く天眞の心もて只管工夫するの境に至れば、茫乎として暗黑中に直遙する如く、再び第二の昏散來りて稍々單一の妄想を明かに現し出し、往々怪異の事起り始む。

飄然來て吾面前に顏を差出す者あり、見れば三人の知己あり、互ひに談話して我れ亦何やら慷慨談を熱心に述べ續くると盛んなり、心着きて見れば三面脫然として肉剝げて白骨の人と成り、坐したるまゝ禪窟を退き出づ、吾肉震ふて胸塞し、歷々として夢に非ず、深く友に盡すと足らざりしを感じぬ。

三女等の顏入り來る

夕暮の頃なりし、多くの乙女恭しく入來りて賑やかなり、三人の妹が顏のみ吾前に近づく、微笑と心痛との色現はして吾淋しさを慰む、顏色皆衰れて日に黑みたる苦旅の人の如し、余喜憂の感に堪えず、胸打て物言はんとす、言出でず淚のみ

はふり落つ、再び見れば復た隻影を止めず、唯蟬鳴摯々たるのみ、深く人を愛し助けるの足らざりしを覺へたり。

泣かしむる人屢々來る

老ひ窶れたる母人の日に瘦ゆく背姿、室の中程より確かに現れしを見き、無言にてサッ〳〵と禪窟を出でゆく、胸底俄かに悲哀の漣波起り、百憂万感に搔むしらるゝ如し、悄然と室を立ち懊惱と庭前を散歩すれば、舍兄の心ならぬ姿さへふつ〳〵と想ひを突來り連なる人のとさへ思ひ出られて愈々堪え難し、泫然として涙降れば身は尙禪坐に端如たる儘なり、眼前唯無垢の白壁遮るのみ、深く吾が迂濶にして疎そかなりしを知り得たり。

前回の白表紙上「別離」の文を讀み、其夜胸中に潜伏せし海外出發の人現はれ來り、稍忘れし悲み再び新たになれり、果して翌半日此幻影に魅せられて苦悶終に定に入れず、眞誠なる祈禱の聲ハアト――より湧出でしを味ひたり。

夢に、武器を得たり

公案「無字」を工夫して睡りたる夜、一塲の悲夢を見たり、余は赤手にして赤手の乙女を救ひつゝ巨金を保護するに非常の困苦を爲したる匆忙の際、是非一の保護器を作るべしと案出せり、曾て楠多門兵衛の携帶鐵棍子に據り、一層改造して懷中用を作らんと定めぬ、覺めて再考するに案出頗る理に當れり、修禪の影響にやと思はれき。

漸く興味の境に入る

困苦初めの如くならず、或時は一種の樂境に遊ぶ如き心地し、禪味斯くの如しやと推想し得らるゝ時出で來れり、了了了の時了す可きなく、玄玄玄の所更に須らく訶すべし、玄を究め底徹するに至ては深く入る可きなく、居るべき奧なく盡く平常に合せずといふとなし、豈別に特立するものならんや、一相、一行、三昧を成就し得ば吾れ實に吾性をして身を苦殺するとなからしめん、胸底烈火の內自から淸風そよぎて閑日月あるに至るべし。

禪僧厭世の色なし

禪僧の群に交る恰も勇士の陣中に入る如し、余は却て勇猛なれど屢々危ぶみ勵ます、老僧すら强健活潑の者多く、皮肉餘りあれど極めて粗食、極めて大食、喝する時武夫の如く、使命する時號令に似たり、若僧皆苦學難行、勞力最も勤む、

道は死せしむ可らず心氣活世を呑む慨あれと言ふ、暗界に獅子吼を叫びし釋尊の勇、面壁に苦行せし達磨の剛を學べといふ、此陣中の道場に入れば一種の靈氣淸げに莊重を含み、抹香臭くもなく宛然たる一種の哲學講究所なり、而して僧は念佛唱名の陰氣なく社會に直接傳道の働手たるの人たり、誰か社會外の者といふ、誰か厭世の一團なりといふ、肉界外の勇士、社會に手足を延る所廣からざるを嘆くなるべし、漫ろに足利、北條の當時を思ひ出されて慇れなり。僧自ら曰く、厭世は菩薩の本願に背くと。

坐禪堂の觀

堂律極めて嚴重齊肅、堂に入れば莊嚴勇猛の氣滿つ、普通は夜行を多しとす、僧侶、居士、三々五々端坐して無聲沈々、役僧棍棒を提げて靜肅に督し、精進激勵して寸隋を戒め、坐睡等の者を打覺す、鉦を鳴らして屢々歩行せしめ、公案の成否に關せず管長の法戰場に往かしめて工夫せし新案を呈出せしむ、往かずんば棒を掉ふて坐席より引落し出す、若僧泣く者多し、居士は大に寛待せらる、苦行察すべし。

禪宗臨濟派の敎旨

禪宗に臨濟、曹洞、黄蘗の三派あり、相伯仲す、臨濟宗の敎旨は敎外別に不立文字を傳ふと名乘て、直に人心を指て其見れたるまゝの性を佛(眞人)と成し、經巻の字句を墨繩として人を敎化せず、唯各自の工夫に放任して鍛錬せしむ、要する所は學者をして直に根源に徹通せしめて自己人性を識しめ、眞人の靈と吾靈との關鎖を取去り、無作の大機を發得して、自己の利は他の利、他の利は自利なりと圓活無碍ならしむるにあり。

居士號を與へらる

何事を學ぶにも先づ弟子と成らざる可らず、眞に弟子の心と成らざる可らず、然らざる時は其學の威嚴を自ら滅却してかかるが故に、到底其學の妙所を探り難し、尊敬嚴肅の心ほど學徒に大切なるものはなし、余感謝と恭敬の念なき寧ろ嘲笑的若くは傲謾的の輕浮なる萠ある學徒を見る程悲しきはし。斯る故に余は最も謙遜なる弟子たらんと思ふは常なりし、余は燦爛たるクリストの弟子なるに係らず、又此僧門の弟子と成り以て參禪せんと乞ひたり、シカも耶蘇の冠を戴き居れりと名告りて。彼れは破顔微笑して「道に二なし奧義少しく異なるのみ」と諾す、余曰く長短あるのみ其敎理の大悲を尊ぶ

所性質悉く吾教理の愛に似たり唯結果に冷熱の大別ありと、彼れ曰く道は強ゆ可らず御身は御身の心にて見ば可なりと終に天爲居士と命ず。

坐禪の辨豫告

親友氣遣ふて異教徒的の修養を程よくせよと忠告す、余之れに感謝すると同時に或異點に向ふて注意を延けり、世人多く禪定の何ものたるを知らず、徒らに異教の研究なりとす、夫れ禪に禪教、禪法、禪行等種々あり、余其哲理を研究し坐禪を修行するにあるのみ、卻て其効益を世人に紹介して自修鍛錬の好材料たらしめんと欲す、因て次回に坐禪の辨を掲げて其仕方さへ詳くし、以て大に男女諸君に勸めんとす。

小説

人さま〴〵

とむらひ（二）

若松しづ子譯

雜踏を極め、塵穢に紛れて居る世の中に、聊か天然の靜肅なる景色を存して、專念默考の人を招くは田舍の寺で格別宗教的ならぬ人さへ靜けく、淸き其境内に入つては平常になき一種特別の感覺を起し升。或る時片田舍に逍遙して、偶然某の寺の境内に這入つたとが有升た。是は山の中腹にあつて、遙か眼の下には綠の草原に曲り流るゝ淸流の靑瑪瑙に銀の象眼入れたるが如き、寺の彼方森々と繁る木の間に立てる五重塔の靑空に聳へ、鳶、烏などのその廻りを飛び交ふ樣などを眺めて、傍なる石に腰を掛け、息ふ中に、彼方の墓場に二人の日雇取ら敷男が穴を掘るに氣付き升た。これは人足遠く、雜草の多く繁つた片隅で、土の少し盛り上りたる耳で棒紋の目印さへなき墓のそこゝなるは正しく貧乏人の名もなし、友もなきが捨埋にされる處と分り升た。近づいて尋ねて見升と是は貧敷寡婦の一人息子を葬るとて堀るものださうでした。かう聞いて、土になつてさへ貧富の差異をつける世の習慣の事に思を走らせる最中寺の方に鐘の音するは葬式の始まるしらせでした。間もなく墓場に近くは見えも飾りもなき形斗りの葬儀を營む人達で、村人の舁ぐ棺の粗造を覆ひかくす衣さへなく、先に立つ厨僧も布施の少なき故か不勝〴〵な顏付して居り升た。人に見せ度さの喪服着て、眞實ならぬ悲哀を裝

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ふ人はおくとも、よぼ〳〵と棺のあとについて行く老母こそは、偽ならぬ悲哀の人でした。是は即はち死人の母で、貧敷年老いて、夫に死に別れたものが、今また一人息子の亡骸を葬むる處で有つたのでした。足ぶみの慥かならぬ老母を勞はり、慰めやうとて、老母の手を引く女の外に近隣の貧民たれかれが幾人か打寄りあとに附添ひ、村の子供も物見たさに走り集ひ、心なくも笑ひそゞめき、老母の泣顔をさし覗くも有升た。

さて墓に近づき地に下ろした棺を見れば、死人の姓名と享年廿六歳といふと丈が記して有升た。老母は人の手に助けられて、棺の頭の方に跪づき、枯木の如き手を合掌し、默禱し、我子の亡骸の見收めに母心の愛情が切まり迫つて、唇を震はし、身をもだへて居り升た。

兎角する中に棺を地に藏める準備も始まり升た。悲哀と愛情が胸には非常の軋轢するあたりの雜沓、無頓着なる人の掛聲、砂、小石に鍬の歯の音するなど、愛する人の墓邊にはいとも堪へ難きとどもです。周圍の騒が敷は敢果なき鬱憂の淵に彷徨ふ老母を呼醒し升たが、涙にかすむ眼を擧げて、悲歎に亂れて、うつとりとして見通し升た。既に細引もて棺を釣り下ろさんと人々の近づくを見て、老母は手を顔におし當てゝ始めて聲を立てゝ泣出し升た。先に附き添ふた女は老母の腕に手を掛けて、立さうとして、耳に口を寄せ、「マアさう氣に病んではいけない、サア……サア〳〵といつて慰むる積りの樣でした。老母はたゞ頭を揮り、手を顔におしあてゝ、迚も心に慰めを受られぬといふ氣配に見え升た。

いよ〳〵亡骸を穴へ釣り下ろす時になつて、細引のきしる音は老母の身にとつて肉を刻まるゝ思のする樣子でした。然るに何か偶然のさし障りが有つて、棺が少敷ゆるぎ升た時は更に母心の優愛が迸しる樣子が有升た。世の苦惱を遠く離れて過ぎ去りたる人にまだ怪我が有らうかと氣遣はしさに。

老母が遺り惜しさを忍んで墓を去り世に親しみ愛せし夫子の亡骸をさへ今はあとに見て、望も世には盡果たる老の身の淋しさ限りなき我家に獨り歩行を進むる處を見送つて、己も共に心にもだへ、さて思ひ升た。同じ悲歎とはいへ富祐なる人のなげきは、今目の當り見聞した者に比すれば、何の事もなし慰まる友もあり、保養とする樂みも有り、悲みを紛らせ、飛散せ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

せる機會は充分有升、又是に比らべて、若き人の苦勞は何事でも有升まい。心の發達と共に其痛傷は癒へて跡なく、しばし憂の重荷の壓迫が有つても彈力ある其精神は間もなく元に復し、緑濃く、伸び易き其情は、新なるものに纒ひつく爲に時を失なひません。是に反して他に慰む機會のなき貧しきの憂苦、世は冬の日の如く冷たく、新なる喜悦の生出を待つに由なき老人の悲哀、寄る年なみに夫に別れ、赤貧洗ふが如くなる上、杖と頼みし一人子の死をいたむといふわび敷寡婦の憂苦は、嗚呼實に慰藉の力の更に効能なきとを覺え升。何故か尙暫らくそこそこと境内を彷徨よひ、宿に立歸らんとする時、彼の慰手なりし女に出逢ひ升た、老母を淋敷家に伴なつて歸る處でしたが、此女を引止めて、最前見聞した事の本末を尋ね知り升た。

（未　完）

●「夏草」の續稿は、餘白なきに付一回休揭す

摘要

○地租一分を賣却して公債を償却すべし

八月廿日の經濟雜誌は、右の如く題したる注意すべき一新案を立てたり。其方法に云く、

一凡は土地所有者にして其所有地を地租一分を輕減せんとを希望する者は、百分の五の割合を以て其元金を政府に上納すべし、然る時は之を許す、解に曰く、地價百圓の地租は二圓五十錢也、內一圓を輕減せんと望む者は、元金二十圓を上納す可し。

今此方法によりて日本の地租悉く一分五厘となる時は、國庫の影響を蒙むると左の如しと、

現今		完結後	
地租收入	三八、三三六、〇〇四円二五〇	地租收入	二三、〇〇一、六〇二円五五〇
公債利子	一三、六八四、〇五九円〇〇〇	殘餘收入	一、六五〇、三四二円七〇〇
國庫收入差引	二四、六五一、九四五円二五〇	合計	二四、六五一、九四五円二五〇

參照

明治二十三年十二月末民有地價總額……一、五三三、四四〇、一七〇圓〇〇〇
此一分……………………………一五、三三〇、四四〇圓一七〇
之を五分とし政府に上納すべき金額……三〇六、六八八、〇三四圓〇〇〇
明治二十四年三月公債證書現存高……三〇六、六〇〇、七二七圓〇〇〇
此利子………………………………一三、六八四、〇五九圓〇〇〇

故に國庫の經濟に於ては差引損益なくして、而して公債證書を全く償却し了り、尙ほ若干圓の餘金を存するとなり、而して、此新法案の利益は、皇族華族をして土地によりて產を立るもの多からしめ、以て王室の藩屛を强くする事、地方人民をして貯蓄金を增さしむる事、不納者を減少する事、政府の繁勞を減する事等にありと。云へり。

○日本初期の傳道

今は日本人たるフルベッキ氏、日本初期傳道の演說の補遺を去十九日の福音新報に揭載せしむ

明治五年某月日小川義綏氏タムソン氏と共に余が寓居に來り曰く某々の諸縣に今尙基督信者たるの故を以て某々の數氏獄中に在り我輩之を救はざるべからず足下も亦之を謀れと余之を聞ひて悲歎措く能はず即日馳せて大隈重信氏（當時大藏太輔歟）を日比谷門內に訪ふ恰も好し伊藤井上の二氏相携て米國より歸り

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

岩倉右府に全權大使の勅命を稟議せん爲五六の人々と大隈邸に會せられたる時なりき余數氏の面前に於て某々の諸氏基督教を信ずるが爲獄中に在り若し此事外國諸新聞の登錄する所となれば岩倉氏の一行歐米諸國往く所として日本は今尙ほ基督教徒を迫害する未開野蠻の悪國也など其評判を免れざれば折角の目的或は水泡に屬せん貴下宜しく之を謀れと勸告せしかば大隈氏曰く政府は實に其事あるを知らず或は地方の長官が大政府の眞意を知らずして右の不始末あるにあらずや早速取調べ解放の運びをなすとあらんと此日分れて歸寓せり後數週間のうち某氏は中國より某氏は西國より某々氏等は何縣より皆無罪放免の恩命を受けたり是より大に政府の人々基督教に關する方針一變し宗教自由の有樣となれり此數氏の入獄は實に日本傳道の進歩を催したる無言の傳道として甚だ功ある者の第一なり（此事の悉しきは奥野小川の二氏に就て聞くべし）因に記す余或時岩倉大臣に向て曰く日本をして實に泰西諸國の文明に倣はしめんと欲せば宜しく高官有力の者が泰西諸國を巡覽して親しく其制度文物を目擊するに如かず從來日本より巡遊せし者なきにあらざれども皆卑官無力の徒なるが爲に歐米の事物を觀て心に幾多の經驗ある者も歸朝の上之を實際に行ふと能はず或は其目擊せる實說を語るも往々虛誕なりとして斥けらるゝ者之なきにあらず故に閣下の如き有爲の人士は海外諸國に遊ぶに如かず」と岩倉氏答て曰く「善し」

（未完）

○大學總長板垣伯

去廿二日の亞細亞は、痛快なる一篇を献ず、蓋し大學出の俠士三宅君の論か。云く、

伯にして總長の任に當らば、彼教授輩は固より其意外なるに驚き、且其ず爲なきを笑ふべし、然れども伯の經歷彼等と階段を異にし、逢たる虬髯、炯たる眼光、脊味を帶びたる面色顴骨稍顯はれ、相貌堂々として又悽愴たる老勳者に對しては、殆んと近くべからざるの想をなし、竦として畏憚の念を生ずべきなり、更に伯が道理を明かにするに熱心にして、爲めに萬事を抛つの實狀を詳かにせば、曩の驚き且笑ふ者を心服して、我總長を謳歌せしむるの日亦遠からずして、其百難を排して主義を貫徹したるの意氣、終始獨立して泰山移らざるの節操、皆移して以て至大の感化を與ふべき也。伯固より欠點なしとせず、而かも伯にして總長たらば、鮮くも學生の志操を一變するは決して疑ふべからず、必ずや學亦俳諧を得んが爲め耳の卑俗を洗盪するに足らん。

○九鬼氏洋風技術を排斥せし例證
及美術保護論

技術者同盟の名を以て天下に痛告烈叫す。一々例證を擧げて九鬼氏に些との辨柄もなからしむ。其末文に云く、

◎保護者技術者を自己の指揮に從はしめんと　欲する者あり是全國技術者の美術思想も自己一人の能力におよばずと自負する井蛙の見より生ずる過失なり抑も美術の深遠なる不世出の天才一生の全力を費すも尙ほ盡さゞるを恐る、豈に事務者や官吏輩が奔走の片手間位に知了し得るものならんや蓋し美術界は一種の仙境にして門外漢の嘴を入るべき處に非るなり大臣宰相と雖も豪商紳士と雖ども此境界に於ては幼兒のみ小奴のみ猶ほ二位爵の大政事家が本因坊に星目置き公爵華族の若君が小學教師に從學せざるを得ざるが如し故に保護者技術家を指揮せんとするは星目の本因坊に助言せんとし小學生の學者の文を添削せんとする者にして其愚其陋眞に笑ふべし然れども此弊や管見者流最も陷り易くして動もすれば其地位を顧みずして自說を主張し自說に從はざる者は乃ち排斥を圖るに至る噫此過失に陷るの害も亦甚だしと云ふべし知らず今の保護者は此弊に陷らざるや否公平無私の觀察力を有するの君子は必ず知るあらん

◎保護者時好に投ぜんと欲す　るの念急にして伎倆前途の是非得失を考るに遑あらざるものあり例へば歐風崇拜說世に盛なれば頻に歐化を唱へ國粹保存說流行すれば忽變じて洋風排斥を試み世論一變せんとするを見れば忽又變じて排斥せしを無しと恬然揚言するの類なり是其眼中美術無く投機阿世の四字あるのみなれば其弊害固と論を待たず加ふるに又

◎保護者保護を以て其地位を保つ　の材料とするものあり眼中始より美術なくして漫に地位の爲めに保證を唱ふるものあり不知今の保護者此の弊に陷らざるや否

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

故山の日

(一) 愁苦

一人の病者に侍す、而して家人悉く半病、余も亦病後、斷れたる衣之を縫ふの人なく、蒲團の綿出づるも之を繕らふの人なし、家内整頓せず、食餌の時間一定せず、愁雲漠々慘霧濛々たり、燈火の功を知らんと欲せば、之を滅して暗黑とせよ、かームの德を知らんと欲せば、女性を去て乾燥寂寞たらしめよ、嗚呼余豈永久に母の德を忘れんや、無聲の歎、無淚の悲、何ぞ況んや我を慰むるの人なくして、我を憂へしむるの人のみ多し、人生字を知る憂の始めか、余は敢て言ふ、人間基督を知るは一種未知の憂を知るの始めなりと、然り憂を知ればこそ眞の喜悅を得るなれ。

(二) 亡き人を夢む

母と兄と弟妹と五人の死去によりて、余は無常を觀じぬ、而して有常を觀出しぬ、浮世の定まりなきを觀じぬ、而して眞神の常に在すを識りぬ、短き人世を觀じぬ、而して愛の無窮を悟りぬ、故に初めは甚しく哀苦に沈み、今は頗る感謝に堪へざるなり、而も人情、喜樂ある毎に、愁苦ある毎に、亡き人を想ひ出さゞるはなし、

一日裏の河に魚を捕る、母在ませり、余母に請ふて盥をとり、魚を之に放つ、瞬間思へらく「俚諺に曰ふ、魚の夢を見るは凶事の兆なりと、而して是れ夢に非る乎」と、母に問ふて曰く「這は夢にては非ずや」と、母微笑して未だ答ふるとあらず、余思ふ夢に非すと、暫くにして覺む、

後の日、一室に坐す、母來り給へり、仕立上げたる羽織を携へ、手づなら余に着せしむ、羽織の丈長し、母離れてよく見給へり、余思へらく「余が年長じたるを以て、身長も延びたらんと思はれ、而して長く仕立給ひしならん」と、喜悅の情を短語に發しぬ、曰く「先きに着たるよりも長し」と、更に熟々視れば、袖の處は古き別摸樣の布を繼ぎ給へるなり、經濟に巧みなる母、裁縫に妙へなる母、よくも斯く別の布を、知れ難きやうに繼ぎ給ひしものかなと、心に感嘆して、先きに脫ぎたる羽織をとり、「此袖口切れかゝりたり、今の中に縫ふて戴きたし、これは絹なれば仕舞ひ置きて、着たる新らしき分を常に着すべし」と、此樂しき夢は忽ちにして覺めぬ。

(三) 朋友を想ふ

余深情多感、時としては一死惜まざるの盲目的猪勇ありと雖も、時としては「何故に斯くまで弱きか」と思ふ程淚脆く處女の如くなるとあり、今や諸友を離れて獨り茅屋の裏に在り、霖雨蕭々として轉た想慕の念を增す、

一夜仙臺の東北學院にあり、押川先生の演說了る、眼鏡をかけて室の一隅にあるの人あり、思へらく「彼は〇〇君にあらずや」と、相會して歡然、倏忽にして夢覺む。其翌々日、東京より雜誌着しぬ、中に親友の作れる文あり、「粘土流の愛、嘔吐すべき青年」の二篇、痛罵叱咤、紙上聲あるが如し、余見て快然微笑せり、其夜の夢親友に會す、余は自らの哀苦を語るよりも、先づ彼の文の事を語りぬ「今日の青年に最も嘔吐すべき種類二つあり、傲慢なる疎暴擬强者と、柔軟義骨なき粘土流の唱愛空笑者と是也、彼等迂濶者何を爲さんとするか」の句を述べ、相共に一笑せり、而して遂に覺む。

夢に入る者二人、夢みずと雖も深く思ふの人多し、京を發する前病より起きたる友の狀今や如何、余自ら顧みて余が思の清潔善美なるを信ず、此思は余が胸間に幾多愛友の幻影を寫し、余をして覺へず賑然一笑せしむるとあり、余は此情を與へ給ひし基督に感謝せざるを得ず。

(四) 茅屋の生活

苦痛の尤も甚しきは言ひ難きの苦痛なり、悲愁の尤も大なるは述べ難きの悲愁なり、六月九日京を發せんと決せし夜より、余は實に此境に沈めり、而して次第に深きに沈む、是れ眞に母兄弟と死別以後の最苦痛、茫然として爲めに頭重く齒痛む、たゞ祈禱によりて生く、二十日忽焉として悟る、我の身を弱むべからず、我の信仰を高めざるべからず、何を考ふるにつけても、何を爲すにつけてもと、乃ち祈る「信仰と望と愛を持ちて苦慘憂愁の境に悠然として立つとを得せしめよ」と、又祈る「先づ我自らを進ましむるより外なし、如何に思ひ煩ふも詮方なし、希くは我を進步せしめよ、我が思、我が言行、無意に自然に人を導くとを得るに至ら

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

しめよ」と、聖書を讀む時間と、他の書籍を讀む時間を多くし、或は狹き裏庭に武術の獨稽古をなし、或は桂川激流中の巖上に端坐瞑想し、或は父の肩をもみつゝ其經驗を謹聽す、要たゞ自己が智德體の三育を計るにあり。

（五）感謝

二十二日の夕、獨り人無き郊外を散歩す、忽然として自己が精神上の經歷を思ふ、嗚呼我れ傳記に小說に顯はるゝが如き經歷を有す、固より不立派の事多し、されど自ら顧みて立派なりと思ふと無きに非ず、一日又一日、次第に此傳記、小說を神の前に嚴かに、思をもて言をもて行をもて書くとの樂しさよ、我れ人を尊敬するの念尤も深し、而して自己の心の幾何進みしやを知らざると多し、一旦事ある時、自他の眞位地を知り、自ら案外に高められたるを思ひ、感謝し祈願すると多し、嗚呼我が今日の愁苦は、一層我を進ましめんとする神の攝理にあらずや、喜び湧然として前面を仰げば、中ば雲に蔽はるゝ三ッ峠の山頂、神在ますが如く覺ゆ、嗚呼神は近く直ぐに我が上に在すなり、神よ、希くは我に一層の艱苦を與へよ、我は爾の愛を深く感謝す。

二十三日、創世記と出埃及記を讀む、エホバが艱難の中にヨセフを守り給ひし事、モーセの選ばれし事、パロの心の剛愎なる事、讀み來りて深く感ず、嗚呼全能至愛のエホバ我を選び給へり、而して我を艱難の中に守り給ふ、我が導かんと思ふ人々の剛愎にして、爲に我が心を痛むると、豈測るべからざる愛の攝理なるなからんや、嗚呼我身豈重んぜざるべけんや、靈に肉に深く自愛の念を增す、感謝して思へらく、此一日心の進步に於て、實に不信者たりし時の一年に相當すと。

（六）富士山

二十三日夕、霖雨全く晴れ、雲霧漸く散じて、始めて富士山を見る、覺へず手を拍て莞爾たり、嗚呼富士よ、爾は誠に我が愛友なる哉、梅雨濛々、孤情寂々、自ら思ふ西鄉南洲が大嶋に謫せられし時の情の如きかと、而して今や晴天爾を見る、我寂情の半分は爾によりて去れり、嗚呼我の此地に立つ、豈爾の獨り立つが如くならざらんや、爾と我と眞に能く似たり、以て互に無言の同情を寄すべし、○○先生嘗て余に戲れて曰く「富士は君が理想の佳人なり」と、嗚呼理想の佳人、爾と我との間に於ける神の媒妁、余は喜んで之を謝す。

明年二十五年六月二十四日　記して女學雜誌社に寄す

日本の一學生

片々

可愛子編

●第一回九州夏期學校　は八月三日を以て、阿蘇郡長陽村埀玉溫泉場に開かれたり、浴場は蘇山連峯の中腹にあり、峻山突兀四方を圍み、溪水鏘然石に激して流る、峻嚴の景、幽邃の境、誠に塵外の仙境なり、山は以て登るべく、流は以て掬すべし、原野諸峯に連互して、綠草天然の毛氈を布く、集る所の生徒、合して百五十餘名、之を縣別にすれば、熊本縣より八十余名、長崎縣より十數名、福岡縣より卅餘名、佐賀縣より十數名、宮崎、大分より各々數名等にして、之を學校別にすれば、長崎鎭西學館及活水學校、東山學院第五高等中學校及醫學校、第二高等中學校、專門校、慶應義塾、柳川橘蔭學館、同志社、熊本英學校、山鹿城北學館等の各學校なり、來校の女生徒は九名にして、各地の學校教師三十餘名。講師には同志社より小崎弘道君、浮田和民君、東山學院長大儀見元一郎君、長牧師木村七十郎君、第五高等中學校教授農學士某、シドニーギユリキ君、校長職原惟郎君、の七名なりし。三日は開校式にして、四日は親睦會、及び諸教師の講演、五日より十二日まで有益なる講演くさぐさあり、十二日、感謝讚美の聲と共に閉校式を行ふ。

◎九州聯合靑年會　此度九州各地の靑年が、夏期學校に集まりしを機會とし、聯合靑年會組織の計畵あり、發起者は熊本の渡瀨常吉氏、佐賀の江藤用四郎氏、三池の鹿毛和一氏、大分の西宗六氏、久留米の坂本辰之助氏、柳川の眷野力三氏等にして、明年第四月を期して大會議を開き、組織上一般の事に付きて協議すると に决せり、九州進步軍の運動、是より愈々花々しからん。

◎女生徒の功績　今回の夏期學校に集りし女生徒の功績は著るしきものなりしと云ふ、初め女生の入校に就ては、人々皆不本意の方にて、遠慮する事宜しかるべしとの議もありしが、而も入校の女生徒は、諸講師の食膳掃除、洗濯、病人看護、料理等の事に就き、大に周旋奔走せられ、其の勵誠に著るしく、女生徒の入校は益多くして、弊害の一點も存するなきを見認め、來期の夏期學校より公然募集する筈なりとぞ。

◎來期の夏期學校　は肥前島原溫泉に定め、校長は大儀見元一郎氏に依賴する筈なり。

◎質問會、講義會、演說會、運動會　は今回の夏期學校に於て數回開設せられ、高談快論堂上に湧き、拍手喝采蘇山を動かせり、就中十一日の運動會の如きは尤も盛なるものにして、埀玉溫泉開闢以來未曾有の盛會なりと溫泉場の者等の感賞する程なりしと。

To the slowly growing acquaintance with the uniform coexistences and sequences of phenomena,—to the establishment of invariable laws we owe our emancipation from the grossest superstations. p. 9. 5.

吾等が漠然たる迷信迷誤の中より歩を進め出したるものは不動確固なる天則を智識したるによる言を換れば常に同時に起り若くは引續て起る所の現象に漸次に親しみ其智識を徐々增加したるによる。

スペンサーが云ふ所の「サイエンス」の理法とは即ち之れか。果して然らば尤も價値ある智識は皆な「サイエンス」也、即ち惣ての有益なる學科なりやと云はゞ其時に尤要する智識なり理法なりと云ふに均しく、又喩へば何ものか尤も大切なる理法なりと云ふに同じ、之に解釋を與へたりと云ふ可らず　故に價値ある智識は「サイエンス」なりと云ふと雖も、實は之を科學なりと云ふの義にあらず。たゞ理法なりと云ふに異ならず。文學も哲學も其中に含まるゝとたるなり。

(八)、アレキサンダー、ベインは、その「科學とその教育」なる書の第五章に、極めて精密に「教價」を論ぜり。蓋し教價（エヂュケーション、バリウ）と云へる語も實はベインの創用に初まりたるものなり。氏は學科を大別して心を教練するのと、實用の智識を與ふるものとの二種となせり。スペンサーは實用の爲に必要なる學科は即はち教練の爲にも必要なり、天の美なる經濟は之を二ッに分つとなしと云ひたれども、ベインは之を信用せざりき。余も亦ベインの論を賛す。夫れ所云る實用とは現社會に對するの實用を言ふなり、而して現社會は不完全にして完全なる人の智德を悉く用ゆ可き處にあらざるが故に、たゞ現世凡俗の實用に供へんが爲に養成するの智識は以て完人を造ると能はざるなり。扨てベインは智識を教練及實用の二に分ち學科を文學及理學の二類となし極めて精密に夫々の教價を論じたり。

(九)、ラサムは其「試驗處置說」中に曰く、智識に只知るとを要するものと直ちに用ゆるものとの二種あり、一は働きを主とし他は記臆を旨とす、記臆を旨とするものとは歷史、地理文學の類なり、實用を主とするものとは數學、晉語、文典の類なりと。斯て氏は只記臆を旨とするものを、實用を主とするもの丶下に置きたり。然れども文學、歷史、地理は心を教練するが爲に用あり、之れを直ちに實用せざるの故によりて之を卑しむべきにあらざるなり。

(十)、近年に至りウイリアム、ペーン氏は其「教育學時論」の第三章に極めて有益なる「教價」の論を揭げたり、然れども其大體はベインに同じきを以て畧す。

（第二段）　教練及實用

(一)、第一段に揭載したる九大家の教價の說區々なりといへども、之を概括するに、智識に教練と實用との二種ありと云へるの說一也。この二種の中甲を優れりとす、乙を優れりとすると共に必要にして同等なりとするとの說二なり。智識に教練及實用の區別なし共に一なりと云ふの說三なり。要するに之を右の三類に分つとを得べし。

(二)、智識に教練及實用の區別なしやと云ふに、既に前段に解釋したる如く、之をなしと云ふは誤の見解より出づるなり。教育は人を完全に發達せしめずんばある可らず。而して人の能力は天と地と、過去と現在と未來とに關係せり。故に人を完全に發達せしめんとせば啻に現在の地の事に對してのみ之れを養成す可らざるなり。然るに、所云る實用の智識とは、即はち、現在の現世に之を活用し、直ちに利益を收むるに足るべきものを指ざすにあるを以て、之が爲にのみ教育するの教育は、眞誠圓滿の教育にあらざるなり。左れば教育に教練と實用との二種なかる可らず。

(三)、たとひ亦た單に現在の現世にのみ實用するとを智識の主旨となすとも、直ちに之を實用するとを目的とする智識の外に、人の能力を教練するの智識なるものなかる可らず。その一は職業の爲に必要し、その二は一市民として國に生存する「カルチュア」の爲に必要す。到底智識に教練と實用との二種なかる可らず。

(四)、既に教練と實用との二種あり、故に其一を養成するときは、同時に他を養成するに同じと云ふとスペンサーが說く所の如きは實際にあるなし。農夫たらんが爲に普通の茶藝を學びたりとも、之が爲に一市民たるの覺悟、品格即はち「カルチュア」を養成すると能わざるなり。

(五)、レーナン曰く、智識の尊きは只實用の爲なり、人はその地位の爲に必要する智識をのみ學ぶとを要す、と云ふが如き低き且つ眞ならざる假想說は、大に破せざる可らず、如此き說より見來れば、文學は只文字の人にのみ必要なり、科學は只だ使役せらるゝものにのみ必要なり、好き風俗と美しき品行とは、世に出て交

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

際する人にのみ必要なり、貧しき人は無學にして可なり、何となれば、教育も智識も彼に必要ならざればなりと云はん哉、あゝ何ぞ神靈を汚す甚しきの說ぞ、心靈を教練するは各人の義務なり、教練は單に現世の爲のみに非ず、その神靈なると宗教と異なるとなし、と。

(六)、智識に教練と實用との二ありとし、其何れをか尤も大切なりとする乎、若くは双方同樣同格に大切なりとする乎と問はんに、双方の共に必要なるは言ふ迄もなし、然れども其の優劣前后を論ずるときは、教練を第一として實用を其后にせざる可らず。人の世に存するや、只だ働らかんが爲めにあらず、働は一の方便に過ぎざるなり、又只富貴ならんが爲にあらず、富貴は亦一の方便に過ぎざるなり。夫れ富み且つ貴くして世事の益を爲すほどに働らくの主旨は、人世に存するの義務を盡し、善を行ひ、以て人たるの德を立るにあるなり。故に教育の主旨、亦た此大目的に適ひ、人をして完人たらしむるの教練を第一にせざる可らず。然れども人たとひ德ありとも、德を實地に用ひ、人を益するの藝を知らずんば、啻に世の交際に益なきのみか、遂に人の助けを乞ひ人の厄介となるに至る可し。故に亦世に立ち相應の職業を執行するとを得るの智識なかる可らず。左れば教練の智識を第一にすべきは勿論なりといへども、實用の智識をも亦忽諸にするとある可らざる也。

(七)、智識に教練と實用との二あり、而して教練を主とし、實用を副とす。ウイリアム、ベーン氏は、之に似たる意見を以て、教育を左の如く分ちたり、

教育
- 實用的
  - 直接
  - 間接
- 教練的特別(スペシフヒツク)
  - 一般(トニツク)

直接の實用とは、技藝の直ちに實用すべきものを云ひ間接の實用とは、若し其事を知り居るときは、間接に我益となるが如きものを云ふ。教練的に特別と一般とあるは、喩へば藥に局部用と强壯劑との別あるが如きを云ふなり。例へば歷史、地理、文學の如きは一般の强壯劑にして、人の心靈を匾滿に教練す、數學、一地方の地理學、植物學(分類の上に於て)生理の如きは、特別の局部用なりと。

(八)、ベーン氏は、右の論法によりて、一層細密に諸學科の教價を分類し、その優劣を表示したると、下の如し、

第一表

學科	實用 直接	實用 間接	教練 特別	教練 一般
讀書	高	低	低	低
文典	中	低	高	中
歷史	低	中	低	高
地理	低	中	低	高
數學	中	低	高	低
生理	低	高	低	低
理學	中	高	低	中
植物學	低	中	低	中
文學	低	中	低	高

右表中、高中、低は其必要の處の高低及中位を示す。

第二表

學科	記臆力	觀察力	理解力	想像力	感情	會得力
數學	中		高			
植物學	高	高				中
地理	高		中	高	中	高
歷史	高			高	高	高
文學	高			中	高	中
理學	低	中	中			
生理	中	中				低
文典	中	高	中			

(第三段) 學科課程編成の基礎

(一)、教育上學科課程の必要なると、隨て學科に教價の多少あると、之に關し諸大

家の説區々なると、隨て教育を教練實用の二種に分つべきや否やの議論あると、到底之を二種に分たざる可らざると等の理由は、前二段に於て畧ぼ説明したり。此に至り余は余が、信ずる所を述ぶべし。

(二)、教育は、人を完全に發達せしむるとを要す、而して完全なる人さは、基督を理想さす。斯て基督の完全たる所以のものは、能く神を敬し人を愛し自己を重んじ、而も其愛敬重の完全なりしが故なり。左れば善良の教育は人に此完全なる愛敬重を發達せしむるものならざる可らず。

(三)、ハーバート、スペンサーは人の活務を五に分ち且つ其の切要の度に隨ひて、序を追ひ記して曰く、第一は直接自己防衞さ、即はち身躰を保護し、生命を安固にする直接の處置を云ふなり。第二は間接自己防衞さ、即はち身躰生命を間接に保護するものにて、衣食住を得るの處置を云ふ。第三は子孫防衞、即はち其子を養ひ且つ教育するの處置を云ふ。第四は自國防衞、即はち其國を衞り國に對するの義務を盡すべき處置を云ふ。第五は快樂、即はち、以上四の活務皆畢はり、尚餘暇餘力あるに於て、美術上の快樂を求むるの處置を云ふさ。而して、スペンサーは、此五の活務に對し、その尤も切要なるものに、尤も多くの智識を與へ、其切要の度少き方の智識を、后に廻はすを以て、學科課程(カリクラム)編成の元則さなしぬ。

(四)、スペンサーは、人の一生を、其肉躰あるの間に限り、人の目的を世に立て完全なる生涯(即はち己を益するを尤も多く、隨て他に害を及ぼさゞるの生涯を送るにありさなし、身躰亡ぶれば即はち我の利益最早失せ行くものさ考ふるが故に、人世の活務を、斯る部分さ、斯る階段さに分たざるを得ざりき。然れども、人の一世は、現世を以て畢るべきにあらず、人、肉躰を取りて現世に存する所以のものは、現世に存する他の同胞に益を爲し、且つ己れの靈を研磨發達せんさするにあるなり。故に、人間の目的さ義務さは、たゞ肉躰ある現在の區域内より立論し、その狹き内よりしてその方向を妄斷す可らざるなり。人は、先づ神を敬せざる可らず、次に他を愛せざる可らず、之を人の尤も大なる義務及目的さす。然れども既に肉躰を取て世に存するが故に、亦た其肉躰を大切にし、人を益するの働きを自由に行ひ、無病壯健にして人の厄介さならざるとに用心せざる可らず。此に於てか、己を重んずるの義務を生ずるなり。

(五)、この故に、余輩は、學科課程を定むるに、左の順序に隨へる覺悟を懷くもの也。

教育は人を完全に發達するとを要す、

完全なる人さは基督の如し、

基督は、神を敬し、人を愛し、自己を重んじたり、

故に、教育上人を完全に發達せしめんには、

一、神を敬し、人を愛するやうに養成せざる可らず、

二、人を愛して、之が爲め實際、力を盡すとを得るの智識あらしめざる可らず、

三、又、身を重んじ、健全ならしめざるざる可らず。但し此身を重んずるは、神を敬し人を愛するが爲の目的に隨ふものなり。

左れば、教ゆる所の學科は、此三段の必要に應じ、且つその切要の度を、順次に遞減せざる可らず。

(六)、第一は、即はち德育なり。其教科は神あるとを教へ、神の性質を教へ、神さ人さの關係を教へ、人の運命及目的を教へ、人の義務を教ゆるにあり。其目的は專ら人の靈性を開發して、其本然に存する敬神愛人の美質を引出し、其肉躰さ能く調和せしめて、之が品德品行を造るにあり。其方法は宗教、倫理、美術、教師の德行、等にして、高尙偉大なる靈の勢力を以て、人の尤高尙なる本心の上に靈の大感化を及ぼすにあるなり。

(七)、第二は、即ち智育なり。而して智育は、人、世に立て人を愛するが爲の實行を爲すの準備なれば、之に樣々の智識を與ふるとを要す。その大躰を云はゞ、職業的、父母的、國民的なり。此の三部に於て、夫々に必要する智識を教へ、内心の愛を相當有益に現はすとを得るの方法を得せしむるとを旨さす。

(八)、第三は躰育なり。躰育に、有形的無形的の二あり。有形的さは、運動營養等によりて、身躰を養ふを云ひ、無形的さは、美術上の快樂によりて、心を養ひ隨て身躰を健にするを云ふ。

(九)、以上三育は、殆んど優劣なき程、同等に切要なり。然れども若し其前後を言はゞ、德育を第一さす、而して智育さ躰育さを其后に双び立つものさす。人若し敬神愛人の念を欠かば、何事を爲すさも益なし。故に德育を最初、最大、最要のものさす。次に人に益を爲さんが爲に、樣々の智識を得たりさも、若し多病にし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て働くとを得ずば、之を行ふと能わず、智識ありとも無きに同じ。たとひ亦身躰健にして、勇氣勃々たりといへども、其愛を實行するの智識を知らずんば、死せるに同じ、故に德育に次では。躰育と智育とを兩ら、同等に切要なるものとす。

(十)、學科課程を撰定するの原則は、之によりて定まりたりとせん。然らば、實際に於て何如なる學科を先にし、何如なるを後にし、又何如なるを增し、何如なるを省き、若くは減ぜん。即はち各學科の教價なるものを、何如にして定めんかと云ふに、余は、之を裁斷料理して、動かざる一定の表の如きものを作るとの、極めて、困難に、而も利益少なきことを信ず。

(十一)、然りと雖へども、何如なる學科をも皆學ぶべし、皆な夫々の益ありと云ふものにはあらず。此類の誤解は、スペンサー、其教育論に於て、曲さに論倒したり。曰く、教育學上に於ては、何等かの益ありと云ふの故を以て、之を教ふるにあらず、若干の時間に、成べき丈多くの利益を、成べき丈ヶ効能ある方法により て得せしむるとを主旨とす、若し何等かの益ありと云ふの故を以て之を學ばゝ、世上の事何事と云へども皆多少の利益なきはあらず、即はち、皆之を學ばざる可らず、と。此論極めて好し。劉廷之が、代白頭翁悲の詩に、

年々歲々花相似、　歲々年々人不同、　寄語全盛紅顏子、

應憐半死白頭翁、　此翁白頭眞可憐、　伊昔紅顏美少年、

今日の美少年、暫らくして半死の白頭翁となる。人生の短きは、二ッの指を彈く間の如く、雨滴の簷より下に落る隙の如し。永遠に續くべき靈の智識に至ては、何如に小さきとをも、何如にも多く學び置くべし。何んとなれば、其は永遠に續くものなれば也。只だ此世に立ち、人に對して其愛を現はさんが爲の世の智識を學ばんには、短き人世に於て、尤も多く人を益するに足るの智識を學ばずんばある可らず、然らずば、死の招き直ちに到り、未だ何事をも人の爲に爲さざるに先ち、身已に墓中に入らんとす。遺憾何んぞ及ばん。左れば、人は何如なる智識をも皆學ぶべきにあらず、精に撰びて、尤も益あるものを學ばざる可らず。

(十二)、此に於て、漸く學科課程の必要を知るなり。左れど、その一般を概括して之を通論するに當りては、たゞ學科課程を編成するの覺悟を示すの外ある可らず。特殊個々の各論に入りて、何如なる學科を增減取捨せんとすと云はゞ、學生の年代に隨て、之を異にすと云はざる可らず。故に、各學科の教價をたゞ絕對的に論定するとを得ざるなり。此后、各年代の各種の教育を論ずるに當り、其都度、各學科の教價に論及するを以て當然のとと信ず。

第四章

一段　序

(一)、大學校の教師は曰く、最早其生徒の氣質定れり、何如んともすることと能わずと。中學校の教師、小學校の教師、皆均しく順次に、同様の事を言へり。然らば、生徒が氣質は何歲に於て定まりしや。幼稚園か、幼稚園の保姆は、歎じて曰く、最早其の氣質を改むること能はずと。左らば母か。母は其兒を對觀して云く、生れたる時より、既に此兒と彼兒とは相違したりと。斯の如くば、人間氣質の相違は、最始何歲に於て始まれりや。胎内か、曰く未だし。其胎内に宿せざるの以前、既に父母の遺傳、未來の兒の一生を支配すと云ふべし。

(二)、故に余は、教育學本論に入るの第一回に於て、先づ遺傳の理を說かざる可らず。未來の兒を造出するに於て、先づ最始に働らく所のものは、遺傳の理法なり、而して其兒發達し、異日の父母となりて、第二世の兒を擧ぐるに至るとき、即はち教育學の區域を離るゝの時も、亦た遺傳の理法によりて支配せらる。左れば、人は、遺傳に始まりて遺傳に終る、教育學の終始開末は、遺傳の理法を以て序とし、跋とすることを見る也。故に余は、先づ遺傳論を以て始め、終末に至り亦遺傳法を以て結ばざる可らず。

二段　遺傳の偉積

(一)、ジョウセフ、クック氏は、尤も愉快に遺傳の事を講述したり。其遺傳講義錄の第一章に、昔しグリーキに於ける數多の俊才英傑は、大抵遺傳の爲に起れりと云ひて、先づ希臘國に著名なりける人々二十八氏を列擧したり、

紀元前五百年より三百年に至る二百年間に於て希臘人種が出したる偉人表

政治永家大元師には

Miltiades ; Leonidas ; ThemistocLs ; Aristides ; Cimon ; Epaminondas ;

Phoeion ; Pericles.

吾黨之女子教育

嚴本善治編　小形二百十七ペーヂ　定價郵稅共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る、嚴本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なることなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして　世の同志に示すことゝす。

全部十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何なか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母姿論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
發音に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君内助の辨……百五十九
當今女子教育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

明治女學校出版　女學雜誌社發賣

雜誌發行　東京市神田區猿樂町二番地　速記社　速記應囑

「速記者」ノ發行　速記應囑

速記社ハ速記術ノ眞相ヲ表示スル爲メ毎月一回「速記者」ト題セル雜誌ヲ刊行シ弘ク公衆ニ販賣ス
◎一部三錢十二部前金卅錢◎無遞送料

東京市神田區猿樂町二番地　速記社

速記社ハ帝國議會ノ速記ニ從事シタル上等ノ速記者ヲ以テ組織シ演說議事其他何事ニ限ラズ親切敏捷精妙低廉ヲ旨トシ御應ニズ

速記ノ御依賴

●播磨水害義捐金募集廣告●

災害相濟は人類自然の義務なり復何ぞ贅言を須ん郷國今茲の水害は一時の供給すら已に數萬圓を費し且其修繕等の費に至ては將に數百萬圓を要せんとす其慘狀如此罹災者は居るに家なく耕すに田なく父子兄弟相胥て溝壑に轉せさるもの其れ幾何ぞ是れ豈同胞の坐視する所ならん依て茲に我同鄉人と江湖の仁人とに訴へ聊か極濟の萬一を補はむと欲す大方の君子幸に吾輩の微衷を諒し陸續義捐あれ

一義捐金は金拾錢以上の事
一義捐金受納は九月廿日を以て限りとす
一義捐人の姓名及ひ金額は播磨雜誌に掲げて領受證に代ふ
一義捐金は受納期限の翌日を以て兵庫縣廳へ送附し適宜の處分を請ふ
一義捐金の送附は左記の所へ御届を請ふ　但播磨助長會々員は會費と一同に御送被下候とも不苦候也

◎東京市本鄉區元町一丁目六番地　稽照館
◎同下谷區谷中初音町四丁目廿一番地　播磨助長會

明治廿五年八月

發起人（次第不同）

赤松則良　柴原武雄　岩橋靜彥　木村春東
福原直道　安井健吉　山田安榮　平岡万治郎
下里子　魚住長胤　楠田謙三　田村武治
井上文慈郎　野口貳貫　山下敬太郎　栗原政藏
桑田房吉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

毛のはへる香油

一名ふけ志らず **美人かつら**

大瓶 金三十錢
中瓶 金二十錢
小瓶 金十錢

イヨー寄妙〳〵コンナ藥鑵でサヘ毛がはへるから拔毛や薄毛抔は直に澤山毛がはえるに違ひナイ

此美人かつらは極々清淨なる植物油をうすめたるものに髪をこやし毛をはやす効能藥を加へたるものにして男女常に髪化粧に用ゆれば髪をこやし髪の發育を盛んにし髪の拔落てはげる事なく志らが赤毛となる事なし又髪のうすきを厚くしほそきを太くしのぼせなどのうれいなくふけやできものなどを生ずる事なし又産前産後などに髪の拔け始めしときは少しも早く塗用すべし拔け毛を止め毛あしを速くする事妙なり又既に拔け落たるあとなつぼしできものやけどのあとなどに塗り附ればおのづからいつとなく毛のはへること眞實なり男女殊に髪化粧に最とも適當のものにして髪はさら〳〵としてつやをもちねばつきあせ臭き等のうれいなし用方小なる筆か小ばけにて髪の根に塗り又は常の水油の如くして用ゆべし

御遠方より御注文の節は郵便爲換又は郵便切手代用にて宜敷猶本物に付通運便にて御送可申候

懷中頁藥

たまかつら

紙製 一錢五厘
布製 二錢

主治 づつう●はのいたみ●うちみ●きりきず●ひゞしもやけやけど●りよまちす其外諸々のいたみによし且阿娘の頭痛に腦める津液を以て痛所へ用ゆれば速に其効を奏し暗に清香を發し宛も桃花の朝に露を注ぎ牡丹の夕に雨を過せるが如し自ら美人の粧を作す實に奇製の頁藥也 願ば四方の諸君愛求を仰望す。

きめのよくなる

新製 たまごぬか

一個にて十たび分 定價一錢五厘

●此玉子ぬかは御婦人がたの常に御用ひのぬかへ藥を加へ玉子にてねりたるものにて御用ひの節はゆでも水にてもしめし手のひらにてすりおとし其の手にて程よくはだにすりこみ手ぬぐひにておひおとしなさればはだはゆで玉子のむきたての如くうつくしくなりておしろいのり寄妙なり但し御つかいのあとは紅糸の所をかけざほ又は釘にかけおきいくたびも御つかひなさるべく又玉子ぬか一ッにて十日位ひ御用ひ相成候御徳用第一のぬかなり●御進物用美れいなる折詰調進仕候也

●元祖色白くなる三能しやぼん 一個 十錢

●おしろい下日にやけぬ水玉のはだ 六錢

東京銀坐一丁目つやぶきん本家

發賣元 **佐々木玄兵衛** 電話番號四百七十二

各府縣下は有名確實品販賣藥舖又は和洋小間物店にて取次賣捌仕居候間御最寄にて御購求奉希上候

黨報 第十九號

（八月廿五日）

◉黨論

○内地雜居論（承前）……江口三省

○海外通商論（第二）……栗原亮一

◉論說

○農家警意見……井上甚太郎

○伊藤新内閣に就て……原田十衞

◉黨報

○代議士會○板垣總理の一行○星、立川兩氏の一行○越佐同盟會の議決○鍋節代議士絶交せらる

◉外報

○英國々會閉會の勅語○英國下院代議士職業類㵎○英國保守黨内閣倒る○グ翁の當選を妨けんとす○墺國の社會黨○墺國と朝鮮○佛國下院の激戰○佛國新海軍卿の履歴

◉時事

○震憂○新内閣施政の方針○井上伯○陸奥氏○渡邊氏○嗚呼我が主義○豫算○水害救助○田尻博士○清浦氏○地方官第二の更迭○次官○民黨○國民協會の二頭○警部長○干涉知事○官吏登用法○高知縣郡長の罰俸○國民協會と政府の關係○冒險的遠征者○敎育家故辻敬之君○弄花事件○辭職勸告○時事日記

定價一部六錢十二部六十六錢

發行所 東京芝公園 自由黨々報局

◉◉◉ 毎月一回發行 ◉◉◉

(◉速記彙報◉)

正價一冊八錢 ◉ 十二冊前金九十錢 ◉ 全國無遞送料

速記彙報四十四要目

●源綱紀 ●發音計算法 速記者ヲ教料書編纂ニ利用スルノ意見 篠原友太郎 ●停會後ノ衆議院議事速記 臼井喜代松 ●貴速會ノ發會 山田武八郎 ●海軍造兵廠ノ廣告 ●消息 ●仙臺紀行 臼井喜代松 ●貴速會常集會 ●速記者談話會 ●速記彙報ニ關スル新聞雜誌ノ評 ●女速記者 ●福岡速記小話 澤木友喜 ●外數件

東京神田區裏神保町一番地

速記彙報發行所

築地廿六番

立教女學校生徒募集

從來ノ豫科本科撰科ノ外更ニ高等科ヲ置ク

入學志願者ハ九月十日迄ニ申込ベシ

規則書ヲ要スル者ハ郵券二錢ヲ送ルベシ

廣告

澁谷つち

右同人儀、女學雜誌社、孤女學說、愛隣會等に關係ありと、吹聽致居候へ共、毛頭關係無之者に付、此段廣告候也。

明治廿五年八月 藤井米八郎

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

本校ハ校舍完備土地高燥市街ノ雜沓ヲ避ケ眞ニ教育ノ良地也本校ハ學科ノ程度ヲ低クシ之ヲ授クルニ老成ノ教師ヲ以テシ務メテ應用ノ力ヲ養ハシム
本校ハ次學年ヲ九月十一日ニ始メ各科共入學ヲ許ス
志願者ハ八月中ニ願書ヲ出スベシ規則書ハ貳錢ヲ要ス

大阪東成郡清堀村

私立 **浪華女學校**

廣求

女禮の教授を兼ね且つ代數幾何の教授に十分堪ゆる數學力ある女學校の取締たるべき**婦人**一名並に**男教師**一名**至急懇聘**したし右廣く求む。
右双方ともに熱信の基督教徒たるを要し九州地方の某所に勤むべき者とす。給料は前は十圓乃至十五圓、后なるは十二圓以上二十圓とす。右望みの諸君は履歴、現今の地位、一生の志望、受洗年月、所屬教會、及び其親友知己數名の名を記し可成く早く左の名宛にて郵便書送ありたし。

東京下六番町六番地女學雜誌社　巖本善治

入學志願者ハ齡廿二年已上普通教育アリ身躰健全品行方正ナル婦女ニシテ九月十日迄ニ申込アレ但在學ハ二年間學資ハ食費而已ニシテ授業料ヲ要セズ規則書入用ノ方ハ貳錢切手ヲ送付アレ

京都烏丸上長者町

京都看病婦學校

林學士 星野慎之輔君著

昆蟲 植物 金石 **採集法**

小形洋綴美本 正價金八錢 郵稅金二錢

發賣元 **女學雜誌社**

來る九月十二日開校高等普通豫備の三科共試驗の上入學を許す志願者は前以て申込べし規則書入用の者は郵券二錢を要す

神戸山本通四丁目

神戸英和女學校

普連土女學校生徒募集

本校ハ來ル九月十二日ヨリ次學期ノ業ヲ始ム
本校ハ從來設置ノ豫科ニ入學シ能ハザル者ノ爲メニ假リニ科外一年ヲ設ケテ入學ヲ許ス
本校ノ授業料ハ當分左ノ如ク改正ス
科外一年ヨリ豫科二年ニ至ル　金七拾錢
豫科三年ヨリ本科三年ニ至ル　金壹圓
本校ハ今回女子日常普通學科ノ教授時間ヲ増加ス
本校ハ各學部ニ熟練ナル內外教師數名ヲ聘シテ懇切ニ教授ス
本校ハ高燥ニシテ眺望ニ富ミタル寄宿室ノ設ケアリ
入學ヲ望ム者ハ郵劵貳錢ヲ送ラバ規則ヲ呈ス

東京市芝區三田功運町三十番地

私立 **普連土女學校**

●女學生募集

本會ハ會員少女撰修手藝ノ四科中ニテ普通高等女學志願者ハ勿論既婚晩學ニテ充分修學ノ暇ナキ婦女ヘモ適宜ノ學藝ヲ授ケ賢妻良母ノ養成ヲ期ス●外國人三名內國人十名ノ專門教員各科ヲ擔任ス●豫備前期新募ス以上高等科迄缺員アリ●志願者ハ九月八日迄ニ申込ベシ

大阪道修町貳丁目

大阪婦人學習會

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

史海　第拾五巻　目次

●最澄及空海……田口卯吉君

最澄空海ともに我邦宗教界の豪傑なり、然るに尋常の史は之を顧みず、僧史は之を以て人間以上に上ぼせり、共に是れ偉人を遇するの方法にあらざる也、此篇を讀む者、能く當時我邦の宗教の有樣を知り且此二人の偉人たる所以を知らん

●トーマス、マコーレイ……矢部新作君

是れ英國の史家マコーレイの傳なり、矢部君の文は柿の如し其甘味日月と共に增す

●東方問題の起原としての十字軍……湯原元一君

十字軍は歐洲史上の大事件なり世人須らく一讀すべし、此篇說き得て詳なり

史海の批評欄は今や一大修羅場となれり、我邦古來史論の快戰未だ此の如きなし

每月一回第四月曜日發兌●定價一冊金九錢、十冊金七十五錢●市外は一冊に付郵稅二錢宛申受く●總て前金之事

田口卯吉君著

史海

（日本の部、巻之一より巻之九に至る田口卯吉君著の部分を編輯す）

定價三十錢　豫約價廿錢　（市外郵稅四錢申受）

豫約申込九月十五日迄同日出來の事

史海の前巻既に賣切となれるもの多し而して後巻の讀者にして頻りに前巻を要望せらるゝと雖も之に應ずる能はず遺憾少なからざる也故に今豫約法により之を出版し以て江湖の愛讀を請ふ（巻之八は發賣禁止となりたれども之に掲げたる孝謙天皇の篇は訂正の上掲載せり）

東京市京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

鈴木弘恭大人講述

第四版

百人一首講義

附錄小倉てびき

正價金廿八錢　郵稅四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて百人一首それ〳〵の歌の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

發兌元　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目　瑞穗屋卯三郎
同錦町二丁目　武藏屋藤藏
同尾張町二丁目　東海堂
同彌左衛門町　巖々堂
同表神保町　東京堂
同出雲町　警醒社
同鐵砲町　指金堂
同元富士町　盛春堂
同雉子町　團々社
福岡縣福岡　積善館支店

神奈川縣横濱市　共同新聞發賣會社
同　同　万字堂
京都佛光寺烏丸　東枝律書店
同新町竹屋町　便利堂
大坂本町四丁目　岡島支店
同　福音社
神戶元町四丁目　福音社
函館市　福音社
熊本縣熊本　草野門平
京都新町二條　大黑屋書店

女學雜誌市內賣捌店

麴町區上六番町　日盛堂
同三番町　梅仙堂
同　福音舍
同飯田町　三文字屋
同　洗心堂
神田區神保町　松江堂
同　青柳堂
同雉子町　大塚書籍店
牛込區神樂町　積善堂
同　正導舍
同肴町　深田彌兵衛
本鄕區弓町　文字堂
同　就本堂
同富士前町　解明堂
同　盛春堂
同二丁目　古河屋

下谷區東黑門町　三一堂
神田區松岡町　山口次郎
同旅籠町一丁目　横本
同鍋町　清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目　庭花堂
芝區櫻田本鄕町　鈴木新兵衛
同南佐久間町　栗原
同　鈴木
赤坂區新町　赤川市兵衛
同同　飯田
京橋區尾張町　鈴々木
同出雲町　金盛堂
同　川田屋
本鄕區天神町　改進堂
神田區小川町　大塚雜誌店
同錦町二丁目　眞故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學生夏期號外

去る廿二日發兌せり　其題目下の如し

一休和尚 ……… 天知子
一休は乾質矯激家なり
一休は厭世的宗教家に非ず
一休は宗教界の俠客か
一休は懷疑哲學家なり
一休は八世の半可通なり

故人 ……… 無名氏
むかし半掃庵は奈良茶の煙に故人の魂を招き、これは故人を尋ねて母戀しの聲を聞く、

英雄 ……… 山月子
彼は常に最も美なり
彼は變化無極の活文章なり
彼は誠涙活火の人なり
彼は天然を愛する詩人なり
彼は基督の良僕なり

孤飛蝶 ……… 脱蟬子
花に飛ぶ蝶、宙宇に舞ふ蝶、此文を併せ見ば、味亦深し

怪しき木像 ……… 暗光子
愛眼もて荒法師を觀じ、無聲もて千載古豪を呼ぶ

望夫石 ……… 夕軒子
夏の夕べの漫歩きに往きぬる春の物語、苦にしみいる乙女の微笑か濱の月魂

鎌倉紀行 ……… 紫莚山人
遊意所向既に人に異る、わび住居に鄕を思ひ友を憶ふ

松風夢 ……… 禿木子
村荘門に客なく幽窓松籟を聽く處、雜感湧出寫して此篇に在り

號外一册六錢●無郵稅　　女學雜誌社女學生部

女學雜誌第三百二十號より改正仕り同號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上め**雜誌代金**至急御拂込相成度候。亦改正致度候間舊號迄の爲替は**麴町郵便局**へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事
一雜誌及ひ書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價廣告料及無料廣告

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊(半年)	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同	二圓六十三錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊(半年)	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊(一年)	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵稅	金五厘	

一行(廿七字詰)	一回	前金	拾錢
同	三回以上	一	割引
同	六回以上	二	割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增と定む。

發行所
東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY